

# 増野悦興の晩年の『日記』と日本同仁基督教会(三)

滝澤民夫

はじめに

増野悦興ましのよむき(一八六五―一九二二)晩年の一九〇九―一九一一年の『日記』三冊のうち、本稿では一九一一年の第廿四号を翻刻し、注と解題を加えて紹介をする。逝去する年の増野は日本同仁基督教会飯田町教会牧師の勤務もままならず、病床に臥す日々となった。五月一七日には高田畊安の東洋内科医院(高田病院)に入院し、夏は越したものの、五カ月間の入院闘病もかなわず、一〇月一八日未明に、妻咲子に看取られて他界した。享年は師の新島襄と同じく、四六歳であった。

本史料紹介は増野研究に関する史料的補遺の第三回である。翻刻にあたっては、確認できた人名に「補足」を加え、事項等については月毎に注釈を加えた。人物については、確認できた場合に生年・没年を入れた。判明している人物はすでに「増野悦興の晩年の『日記』と日本同仁基督教会(一)」「『同志社談叢』第四一号」・同(二)(同第四二二号)で注記を入れているが、解読の一助のために、極力重複を避けつつ注釈を加えた。日記および注釈中の「」は筆者が補足した。

キーワード…日本同仁基督教会、ブラックマー・ホーム、ユニバーサリズム、*The Universalist Leader*、安部磯雄、

ケールン、アズバン、ロプデル、岡田恒輔、岸本能武太

増野悦興『懷中日記』第廿四号 一九二一（明治四四）年 四六歳

見開き頁 上部書き込み 信忍勤<sup>①</sup>

（一）『日記』第廿二号は「不競不喧」、『日記』第廿三号は「我殺」、『日記』第廿四号が「信忍勤」。その意味は昨年「増野悦興の晩年の『日記』と日本同仁基督教会（二）」の解題（『同志社談叢』第四二号）に記した。

- 一月一日 晴 四方拜
- 一月二日 晴 氷点以下五度
- 一月三日 晴 三元始祭 旧藩宴会発起人、安部「磯雄」ヨリ来状 発起人へ出状 葛岡来訪
- 一月四日 晴 「増野」公平ヲ保険会社へ遣ス 坂本、三笠来訪
- 一月五日 雨 堀江頼貞来訪<sup>①</sup>
- 一月六日 晴 風 岡田正男ヨリ来状 岡田へ出状
- 一月七日 晴 中島「徳蔵」<sup>⑥</sup>へ原稿出ス ケールン<sup>⑦</sup>来訪
- 一月八日 曇 中島、安部へ出状
- 一月九日 晴 駒込<sup>⑤</sup>へ出状
- 一月十日 雪 安部間ヨリ来状

一月十一日 雪 平野、菱田ヨリ来状 平野、菱田、三並〔良〕<sup>(9)</sup>へ出状 杉浦忠雄<sup>(10)</sup>ヨリ来状  
 一月十二日 雨 雷 ロブデル<sup>(11)</sup>へ出状  
 一月十三日 曇 西村(原稿)、告森へ出状 水平〔三治〕<sup>(12)</sup>ヨリ小包、ユニテリアン<sup>(13)</sup>ヨリ大会記録来ル 水平、三並へ出状  
 一月十四日 晴 忠雄来訪 アズバーン<sup>(14)</sup>、グリーン<sup>(15)</sup>ヨリ来状  
 一月十五日 雪 グリーンへ出状  
 一月十六日 晴 北沢あきのヨリ来状  
 一月十七日 晴 ロブデルヨリ来状  
 一月十八日 晴 ロブデルへ出状  
 一月十九日 曇 駒込へ出状 グリーン、教会幹事ヨリ来状  
 一月二十日 雪 蘆川ヨリ来状 蘆川へ出状  
 一月二十一日 晴 丁酉幹事<sup>(16)</sup>、畑<sup>(17)</sup>三ヨリ来状 畑、グリーンへ出状 葛岡来訪  
 一月二十二日 晴  
 一月二十三日 晴  
 一月二十四日 晴 蘆川ヨリ来状 小久保来診<sup>(18)</sup>  
 一月二十五日 晴  
 一月二十六日 晴 ケールン来訪 タイムス<sup>(19)</sup>ヨリ来状  
 一月二十七日 晴 ケールンへ出状

一月二十八日 雪 岡田恒輔ヨリ来状 岡田へ出状  
 一月二十九日 晴 ケールン、駒込へ出状 藤原達三来訪  
 一月三十日 曇 孝明天皇祭 ケールン来訪 岡田正男ヨリ来状  
 一月三十一日 雨 岡田、ケールンへ出状

(1) 旧藩とは津和野藩。増野悦興の父増野貞吉（一八四一頃～一九一四）は、明治維新時には津和野藩馬廻。戊辰戦争勃発後、藩命で錦旗守衛隊軍事参謀兼監察として有栖川宮熾仁大総督に率いられた征東軍に加わり江戸に。江戸府判事附属を経て、太政官行政局権少史に任官し、幼少の増野悦興は津和野で祖母増野ふじに養育された。貞吉は一八七〇年末には新政府を辞し、その後は典型的な没落士族として不遇な生涯を終えた。悦興は父親との関係で晩年まで旧藩主の亀井家と親交があり、教育界に職を得てからは旧藩主亀井茲監（元み）創設の奨学会理事も務めた。宴会発起人からの来状はそのためであろう。詳細は『増野悦興研究』第一章第二節に記した。

(2) 安部磯雄（一八六五～一九四九）は増野と同年生まれ。同志社英学校では一級上だがともに英語教師グリーンとの関係がこじれて、前後して同志社を退学している。この当時は早稲田大学で教え、野球部創設にも尽力していた。一九〇九年の『懐中日記』第廿二号・前年の第廿三号・本年の第廿四号にも多くの箇所名前が記されている。前年に岸本能武太と行った増野の財政（負債）整理から本年の葬儀までの詳細は『増野悦興研究』第九章第二節に記した。

(3) 増野公平（一八八七～一九四五）は増野貞吉の三男で、増野悦興の異母弟。最晩年に病臥にあつた悦興の生活を世話し、口述筆記を行い、悦興は公平に小遣いを渡し、授業料を負担していた。悦興は妻子のためにかけた生命保険の受取人を公平に依頼し、後を託していた。

(4) 堀江頼貞は医師。増野悦興の妻咲子の叔母で明治天皇の皇女御用掛堀江義子の養子、あるいは縁戚か。義子は増野夫妻の後ろ盾だった。増野を埼玉県第三中学校校長に推挙したと思われる。堀江義子については『増野悦興研究』第七章第二節に記した。

- (5) 岡田正男は日本同仁基督教会本部教会役員の会計として、本部主事の日本人牧師増野を補佐したと思われる。三冊の日記にたびたび出てくるが、人となりについては不明。
- (6) 中島徳蔵(一八六四～一九四〇)は哲学館(東洋大学の前身)講師。増野が主催した成民会講演会の講師を務めた。増野の要請で「女性訓」を述べた中島は、日露戦後の華美の風潮に対し、女性の「独立の基礎」は、ありのままの価値を自覚してそれを磨くこと(「独立の基礎」成民』第一五号、一九〇八年二月)だとした。肝胆相照らす仲だった中島は、増野没後に「雷軒増野悦興君小伝」(『丁酉倫理会倫理講演集』第一一輯、一九一一年一月)を寄せた。
- (7) ケールン(Gideon Isaac Keirn、一八五四～一九二二)はケート牧師没後一九〇九年に再来日し、三人のユニバーサリスト米国宣教師団を率いて日本同仁基督教会を増野ら日本人牧師とともに支えた。一九一七年の離日まで九年間にわたり布教用冊子一五冊と著作一冊を刊行しながら、夫婦して献身的に伝道活動を続けた。当時の日本同仁基督教会の状況とケールンの活動は、『*The Universalist Leader*』紙の記事の紹介も含めて解題で触れる。
- (8) 駒込は高利貸(小栗雄二郎)が住んでいた場所だと思われる。安部・岸本の奔走で晩年の三年間で財政(負債)整理をした増野は、駒込に対して一九〇九年に二五七円、一九一〇年に二二九・五円、一九一二年九月までに三九・五円、合計三三六円(『日記』記載分は二二六円)返金している。この年の家計状況は解題で触れる。
- (9) 三並良(一八六五～一九四〇)はドイツ哲学者。第一高等学校・松山高高等学校ドイツ語教授。ユニテリアンの牧師となり、日本ゆにてりあん協会の会長を務めた。増野にユニテリアンの「大会記録」を送ったと考えられる。増野との関係の詳細は不明。
- (10) 杉浦忠雄(一八八五～一九七〇)は増野の妻咲子の末弟。先方からの申し入れでクリスチャンの夫婦に引き取られて生育した。一高時代に増野夫妻の瑞豊塾で起居していた。のちに大審院判事。
- (11) ロブデル(Nelson L. Lobdell、一八七六～一九六四)は一九〇五年にタフツ神学校を終えて牧師に任命され、一九〇六年に来日し、静岡教会に赴任した。静岡教会牧師の伊藤仙峰とロブデルの活動は、『*The Universalist Leader*』に報告されている。
- (12) 水平三治(一八六二～一九四四)はボアソナードに学び渡米し、帰国後、八戸や大館でキリスト教伝道に従事した。

一九〇九年末に日本同仁基督教会の秋田教会牧師に任命された。なぜユニバーサリストになったのかは、*The Universalist Leader, November 11, 1911* に手記がある。社会運動家でもあった水平と増野との関係はよくわからないが、幼い娘を亡くした体験と悲しみを共有していたことも二人の結びつきを固くしていたと考えられる。増野の他界後、しばらくして教会から離れ、後に労農党から秋田市議に立候補し、当選した。

(13) 自由神学は一八九七年にユニテリアニズムが、三年後にユニバーサリズムが日本に伝道された。若き日の増野は渡米後、アンドーバー神学校でユニテリアニズムに惹かれるが、バンガー神学校でストルンスの組織神学論を学ぶなかでキリスト人間論を確信するようになり、最終的にはユニテリアニズムをより純化した万人救済論のユニバーサリズムを信仰するに至った。ただ、両者の区別は必ずしも厳格ではなく、安部磯雄や岸本能武太らはユニテリアンのまま増野の日本同仁基督教会の飯田町教会にも参加していた。

(14) アズバン (Miss Catherine M. Osborn, 一八五九―一九二五) はイリノイ州ワールンに生まれ、シカゴ大学を卒業後、一八九五年に三五歳で日本に着任した。翌九六年に婦女子救済施設ブラックマー・ホームを設立し、その後二七年間にわたり米国ユニバーサリスト教会員として日本の貧しい婦女子救済と女子教育に尽力した。増野夫妻の長女文子が五歳で夭折した際に、咲子を励まして『シオドル物語』の翻案を勧め、英文の「序」を寄せた。詳細は『増野悦興研究』第九章補論(3)に記した。増野との交流は増野の他界まで続いた。

(15) グリーン (Daniel Crosby Greene, 一八四三―一九二二) はシカゴ神学校からアンドーバー神学校に学び、アメリカ外国伝道委員会から派遣されて一八六九年に来日。八二年から八七年まで同志社英学校で教えたが、八六年三月に卒業目前の増野ほか八名の五年生がグリーンズの教育方針をめぐって衝突し退学した。当時はデイビス (Jerome Dean Davis, 一八三八―一九一〇) が彼らに懇切な翻意を促す英文書簡 (木村滋子氏蔵「増野悦興文書」[仮目録1-18]) を送っている (滝澤「史料紹介 J. D. DAVIS の二通の書簡」『同志社談叢』第三十六号、二〇一六年三月)。ただ、グリーンからの働きかけは確認できていない。それから四半世紀を経て、増野は何を書き送ったのか。アズバンとブラックマー・ホームの関係ではないかと思われるが、グリーンからの返信はない。この年秋に増野が、その翌年にはグリーンも他界する。

(16) 丁酉幹事は丁酉倫理会幹事で、岸本能武太もその一員であった。

- 二月一日 曇 約束都屋 岡田正男へ出状  
二月二日 晴 岡田ヨリ来状 東洋堂へ出状  
二月三日 晴 河内堂ヨリ来状 ケールンへ出状  
二月四日 晴 ケールン、松尾「音次郎」<sup>①</sup>来訪 河内堂へ出状  
二月五日 晴 小久保来診 河内堂ヨリ来状 堀江頼憲来訪  
二月六日 晴 ケールンへ出状  
二月七日 晴 塘へ出状 安部来訪 教文館ヨリ来状  
二月八日 晴 奨学会、教文館ヨリ来状 教文館へ出状

(17) 畑歎三(一八八〇〜一九五七)は妻咲子の弟。松山中学を経て米国カリフォルニア大学で宗教哲学を学び、帰国後、関西学院で教えた。当時の増野一家を精神面・経済面から支えた。

(18) 主治医の小久保弥太郎医師からは前年九月一日に「向一ヶ年間休養」を命じられ、同二五日には「当分安静ヲ命ゼラル」とある。年が明けて病状はさらに進行し、来診も定期化してくる。

(19) タイムスは高利貸で、前年一九一〇年の金銭支出簿には記載がない。「駒込」とは別の業者で、一九〇九年に六回で三六円、一〇年に六回で三六円、一一年は逝去直前の九月まで、六回で四二円、三年間で合計一一四円を返済している。

(20) 岡田恒輔(一八八三〜一九六〇)は川越中学校第一回卒業生。同校第七代校長となる。一九二〇年一〇月一八日、増野の一〇年忌に岡田恒輔編・増野悦興遺稿集『筆華舌英』を自費出版して、全国の公立図書館に配った。卒業生としては退職後の増野を最も慕い、第一高等学校・東京帝国大学文学部哲学科に学ぶなかで、しばしば自宅を訪ね、往復書簡での交流も続けた。臨終前後の様子も「増野悦興先生伝」(『筆華舌英』)に詳述されている。

二月九日	晴	教文館、奨学会、駒込、田村新吉へ出状
二月十日	晴	中島徳蔵へ出状
二月十一日	晴	〔紀元節〕ロブデル、杉浦来訪
二月十二日	晴	中島ヨリ来状
二月十三日	晴	安部へ出状（原稿） 小久保来診 保険会社ヨリ来状 <sup>②</sup>
二月十四日	晴	夜雨 安部、岡田正男へ出状 山崎〔鉄太郎〕 <sup>③</sup> ヨリ校正来ル、直ニ之ヲ了シ送ル 足ヲ洗フ
二月十五日	曇	アズバーンへ出状 丁酉幹事、タイムスヨリ来状
二月十六日	晴	グリーンへ出状
二月十七日	曇	安部、矢島楯子ヨリ来状 <sup>④</sup> 中島、波多野〔培根〕 <sup>⑤</sup> へ出状
二月十八日	晴	
二月十九日	晴	未明雪 精美堂、駒込へ出状 岡田正男ヨリ来状 岡田へ出状 望月来訪
二月二十日	晴	
二月二十一日	晴	精美堂ヨリ来状
二月二十二日	晴	大熊へ出状
二月二十三日	晴	大熊ヨリ来状 大熊へ出状
二月二十四日	雨	ケールンヨリ来状
二月二十五日	曇	丁酉幹事ヨリ来状
二月二十六日	曇	



二月二十七日 晴 駒込、安部、ケールンへ出状 丁酉幹事ヨリ来状  
二月二十八日 雨 大熊へ出状 波多野ヨリ来状

(1) 松尾音次郎(一八六五)不詳は一八八五年九月に増野らとともに同志社予備校の発起人となり、幹事でもあった。この時期には、増野の勧めで日本同仁基督教会員になり、増野の説教の代理を務め、ケールンの布教冊子の翻訳もしている。

(2) 保険会社は二年前に仁寿生命から日本生命に切り替えた。二円八〇銭の掛け金を年四回払い込んでいた。一〇月の死去に際し、日本生命会社尋常終身保険金五二八円を異母弟増野公平が受け取る。

(3) 山崎鉄太郎の山崎活版所は『成民』の印刷所だった。この時期にも増野は何らかの印刷を依頼していたと思われる。  
(4) 矢島楯子(一八三三〜一九二五)は婦人矯風会初代会長。増野夫妻の長女文子が五歳で夭折した際に、増野咲子翻案の『シオドル物語』に哀悼の歌「意図は矢も天津美園に移されて今や咲く良舞大和なでしこ」(いとはやも天つ美園に移されて今やさくらむ大和なでしこ)を寄せた。

(5) 波多野培根(一八六八〜一九四五)は当時同志社普通学校教頭。のち西南学院大学教授。津和野藩士で漢学者の父波多野達枝の弟が増野悦興の父増野貞吉である。三歳年長の従兄の増野に誘われ、同志社英学校に学んだ。晩年の増野は京都に暮らす妻子や父貞吉の養育費などについて波多野に相談をしており、他界直前の九月まで交信をしている。

三月一日 晴 夜雨 公平ヲ駒込へ遣ス 波多野へ出状  
三月二日 晴 ケールンへ原稿出ス<sup>(1)</sup> 小久保来診 大熊ヨリ来状  
三月三日 晴 大熊来訪 原田助ヨリ来状<sup>(2)</sup>  
三月四日 晴 原田、ケールンへ出状 岡田正男来訪  
三月五日 晴

三月六日 曇 夜雨 駒込、宮田了一ヨリ来状

三月七日 晴 公平ヲ駒込へ遣ス 田宮へ出状 塘、坂本直三郎ヨリ来状

三月八日 晴 坂本へ出状

三月九日 晴 理髪 安部へ出状 北沢〔定吉〕<sup>(3)</sup> 紀念会発起人ヨリ来状

三月十日 曇 夜雨 前本恵美来訪 津和野社ヨリ来状<sup>(4)</sup> 岸本〔能武太〕<sup>(5)</sup> 来訪

三月十一日 雪 夜地震 タイムスヨリ来状

三月十二日 晴 大熊、山田弥彦来訪 岸本ヨリ原稿来ル 安部ヨリ来状

三月十三日 晴 岸本、安部へ出状

三月十四日 雨 甲藤、安部ヨリ来状

三月十五日 曇 ケールン来訪 山崎鉄太郎ヨリ来状

三月十六日 曇 ロプデルヨリ来状 ロプデル、甲藤へ出状

三月十七日 雪 小久保来診 岸本来訪

三月十八日 晴 同志社ヨリ来状

三月十九日 雪 駒込へ出状 ハーバートレビュー<sup>(6)</sup>、済美学校ヨリ来状<sup>(7)</sup>

三月二十日 晴 済美学校へ出状

三月二十一日 晴 山崎鉄太郎ヨリ来状

三月二十二日 曇 春季皇霊祭 三宅龍太郎、丁酉会ヨリ来状

三月二十三日 曇 アズバンヨリ来状 アズバンへ出状

三月二十四日 曇  
三月二十五日 晴 入浴ス。ケールン、杉浦来訪  
三月二十六日 曇  
三月二十七日 晴 小久保来診  
三月二十八日 晴 中島徳蔵ヨリ来状 中島へ出状  
三月二十九日 晴 駒込へ出状 タイムス、岡田恒輔ヨリ来状 岡田へ出状  
三月三十日 晴 安部へ出状 ケールン来訪  
三月三十一日 晴 ケールン、「増野」自助<sup>(8)</sup>ヨリ来状 自助、福音新報、点灯会社へ出状

(1) この時期に刊行されたケールンの布教冊子は、一九一〇年八月の『活宗教の要素』と一九一二年一〇月の『必勝の教義』である。ケールンへ送った原稿は、『必勝の教義』の日本語訳の一部であったかもしれない。

(2) 原田助<sup>(9)</sup>（一八六三〜一九四〇）は当時同志社第七代社長、校友会長も兼任。かつて一八九一年にアンドーバール神学校に修学していた増野にロンドンから、バンゴール神学校の組織神学者ストルンスに学び、「神学の蘊奥を究めよ」（『増野悦興研究』二一六頁）と奨めた。その後、新神学の動向などを伝えた増野の北米だよりを『基督教新聞』に掲載した。増野の死去の半年前に二人はどのような交信をしたのであろうか。

(3) 北沢定吉（不詳〜一九一〇）は法政大学倫理科講師。増野に共鳴して「自覚と没我」（『成民』第五号、一九〇八年二月）、「儒教復活の叫び」（同第一三号、同一〇月）を寄せたが、三〇代半ばで早逝した。増野は「亡友北沢君の生涯より学ぶ教訓」（『丁酉倫理会 倫理講演集』第九三輯、一九一〇年一月）で『偉人耶穌』（一九〇六年四月）を著したこの倫理学者を哀悼した（『増野悦興研究』四一頁）。

(4) 津和野社は津和野小学校同窓会だと思われる。年会費五〇銭であった。

(5) 岸本能武太（一八六六〜一九二八）は宗教学者。高等師範学校教授から後に早稲田大学教授。同志社英学校以来

四月一日 晴 山田準之助ヨリ来状 山崎鉄太郎来訪  
 四月二日 晴  
 四月三日 雨 一神武天皇祭 宮川経輝<sup>①</sup>へ出状  
 四月四日 晴 訪アズバン 自今毎夕祈祷会ヲナスコト一定ム  
 四月五日 晴  
 四月六日 晴 大熊へ出状 山田準之助、安部来訪  
 四月七日 晴 戸外運動ヲナス 岸本来訪

- の朋友だが、同志社神学校を卒業後に岸本は「神と空間」〔六合雜誌〕第一〇四号〜第一〇七号、一八八九年八月〜十一月）を論じ、「真善美と人の靈魂」の關係に懊惱し、キリスト教の伝道者ではなく宗教学者の道を歩んだ。この時期、安部磯雄と共に増野の財政（負債）整理に奔走し、増野他界の直後に、追悼の「講演 増野悦興君を弔す」〔丁酉倫理会 倫理講演集〕第一二輯、一九一一年一月一日）をしている。この追悼輯には巻頭に増野の肖像写真が掲げられている。
- (6) ハーパーレビューはユニテリアン関係の内容と思われるが、未調査である。
- (7) 日本済美学校は一九〇七年に今井恒郎（一八六五〜一九三四）が梧陰塾を改称した学校で、増野は学監を引き受けた。その後の関わりは不明である（『増野悦興研究』三九三〜三九四頁）。
- (8) 増野自助は悦興の異母弟で、父増野貞吉一家の生活を支えていた。貞吉の扶養費をめぐって晩年の増野と金銭的な軋轢があった。増野悦興の渡米に際して、貞吉と費用を負担する代わりに帰国後は家族の扶養をするとの約束があったとも考えられる。帰国後に靈南坂教会の牧師として招聘された際に、増野は「家族モ多ケレバ生活ノ出来得ル丈ノ収入ヲ要ス故ニ牧師トシテ働ク欠ケザル以上教会ノ許ヲ得テ学校教授文訳或ハ著述ヲ以テ生活費用ノ欠ヲ補フベシ」〔靈南坂教会録事』明治二十六年十二月二十四日）と述べていた。

四月八日	晴	駒込へ出状
四月九日	晴	波多野へ出状 宮川ヨリ来状
四月十日	晴	夜雨 山下経治ヨリ来状 <sup>(4)</sup> 山下、「畑」歛三、自由堂へ出状
四月十一日	雨	丁酉幹事ヨリ来状
四月十二日	晴	藤原ヨリ来状
四月十三日	晴	藤原へ出状 山下経治ヨリ来状
四月十四日	晴	タイムスヨリ来状
四月十五日	曇	午後雨
四月十六日	晴	岡田、坂本、ケールン来訪
四月十七日	雨	午后地震 斎藤来訪
四月十八日	晴	ロブデルヨリ来状
四月十九日	晴	長野「直一郎」 <sup>(5)</sup> 来訪 駒込、安部、ロブデルへ出状
四月二十日	晴	
四月二十一日	晴	訪アズバン
四月二十二日	晴	安部、ロブデルへ出状 訪天岫 安部、大熊ヨリ来状
四月二十三日	晴	
四月二十四日	晴	アズバン、天岫、安部来訪 小久保来診
四月二十五日	雨	ケールン、安部来訪 杉浦、津和野社ヨリ来状

四月二十六日 晴 村田「勤」来訪

四月二十七日 晴 訪アズバン 家翁来訪 安部ヨリ来状

四月二十八日 晴 ケールンへ原稿送ル

四月二十九日 曇

四月三十日 雨

(1) 宮川経輝（一八五七～一九三六）は日本組合基督教会の重鎮で、海老名弾正らと朝鮮伝道にも関わった。かつて同志社英学校退学時には、新島襄の依頼で、大阪教会牧師だった宮川も増野らの説得にあたった。後に増野が『基督教青年』の編集に携わった際には、同誌に「娼娼論」を寄せた（『増野悦興研究』一七二～一七三頁）。死去が近づいた時期の交信だが、内容は分からない。

(2) 病を押しての祈祷会は増野の要望か。アズバンの自宅で開かれたと考えられる。四月四日・同二日・同二七日・五月三日・同一日・同二日の六回が記録にある。私的ではあるが、日本同仁基督教会飯田町教会牧師としての最後の活動であった。五月一七日にはアズバンを訪ねてから高田病院に入院している。暇乞いであったかもしれない。

(3) 戸外運動は小久保弥太郎医師の勧めだと思われる。小康状態であったのだろうか。

(4) 山下経治は埼玉県比企郡三保谷村（現川島町）出身の実業家（のち日興証券初代会長 遠山元一（一八九〇～一九七二）の妹静子の夫。増野との関係は不明。

(5) 長野直一郎は名古屋教会牧師。この日と五月一九日、六月二十九日に見舞いに来ている。『日記』からは長野との交流は一九〇九年に一回、一〇年に三回が確認できる。長野の名古屋での活動は、*The Universalist Leader* に報告されている。

五月一日 晴 夕雨 約束都屋

五月二日 晴

- 五月三日 晴 訪アズバン 甲藤ヨリ来状
- 五月四日 曇 平野ヨリ来状
- 五月五日 雨 安部ヨリ来状 ロブデル、岡田恒、杉浦忠、岡田正、福音新報社<sup>①</sup>へ出状
- 五月六日 曇 夜雨 波多野、求道発行所へ出状 小久保来診 杉浦来訪 同窓会ヨリ来状
- 五月七日 曇 同窓会へ出状 大館憲章来訪
- 五月八日 晴 高田病院ニ至リ診察ヲ受ク 高田、桜井、坂上へ出状 松波、岡田正、岡田恒ヨリ来状
- 五月九日 晴 岩口来訪 岡田恒、岡田正、松波へ出状、岩口ヨリ来状 坂上、三笠来訪
- 五月十日 晴 蘆川、高田、鈴木醇ヨリ来状 鈴木、岸本へ出状
- 五月十一日 晴 亀井家<sup>②</sup>、岡田恒ヨリ来状 亀井家、安部、蘆川へ出状 乙女、山崎忠、杉浦来訪 訪アズバン
- 五月十二日 晴 訪アズバン ロブデルヨリ来状 ロブデルへ出状 小沢高来訪
- 五月十三日 晴 断髪 谷ミキ来訪 鈴木醇へ出状 蘆川ヨリ来状
- 五月十四日 雨 岸本、南湖院<sup>③</sup>、高田へ出状 頼貞来訪
- 五月十五日 晴 鈴木ヨリ来状 坂上、村田、岸本来訪
- 五月十六日 晴 小久保来診 安部、蘆川、坂本へ小包出ス ロブデルへ出状 坂本、山下、高田病院ヨリ来状
- 五月十七日 晴 同志社校友会<sup>④</sup>、南湖院、谷、杉浦、安部、郵便局、坂上、自由堂、山下、小久保へ出状 宮内ヨリ来状 午後一時家ヲ出デアズバンヲ訪ヒ其レヨリ高田病院ニ入院ス<sup>⑤</sup>

五月十八日 晴 安部、ロプデルヨリ来状 安部へ出状 山崎来訪  
 五月十九日 晴 公平来訪 安部、中里、村井〔知至〕<sup>(6)</sup>、藤原ヨリ来状 杉浦、ロプデルへ出状  
 五月二十日 晴 忠雄来訪 ケールン、渡辺書店ヨリ来状 ケールンへ出状  
 五月二十一日 晴 公平、安部、鈴木来訪 坂上、ケールン、ロプデルへ出状  
 五月二十二日 晴 杉浦へ出状 坂上来訪  
 五月二十三日 雨 村井、波多野、南湖院へ出状  
 五月二十四日 曇 午後雷雨 公平、杉浦来訪 アズバンヨリ来状  
 五月二十五日 晴 アズバンへ出状  
 五月二十六日 晴 公平来訪 岡田恒へ出状 平沢カツヨリ来状  
 五月二十七日 晴 公平来訪 安川、ロプデルヨリ来状 平沢へ出状  
 五月二十八日 晴 安川、ロプデルへ出状  
 五月二十九日 晴 ケールン、長野来訪 雄弁会ヨリ来状 雄弁会へ出状  
 五月三十日 雨 公平来訪  
 五月三十一日 晴 ケールンヨリ来状 ケールンへ出状 公平来訪

(1) 長らく購読していた『福音新報』発行元への交信もこれが最後となった。

(2) 生まれ故郷津和野の旧藩主家との交信も最後となった。

(3) 南湖院は結核療養施設だったが、増野の病勢は進行しており、東洋一のサナトリウムでの療養はかなわなかったと考えられる。かつて『成民』第一号（一九〇七年九月）には「東洋内科医院 院長高田畊安（東京市神田区駿河台





六月九日	晴	大熊来訪 三宅龍太郎ヨリ来状
六月十日	曇	津和野社ヨリ来状
六月十一日	雨	発知神太郎 <sup>③</sup> 、青山殖 <sup>④</sup> 、逸見、三笠来訪 安部立郎へ出状
六月十二日	曇	入梅 前原「仙次郎」 <sup>⑤</sup> ヨリ来状 河内堂へ出状 松下操、内藤老母来訪
六月十三日	雨	都屋へ出状
六月十四日	曇	波多野ヨリ来状 前原へ出状
六月十五日	雨	安部立郎ヨリ来状
六月十六日	雨	タイムスヨリ来状
六月十七日	晴	岡田恒、甲藤、乙女 <sup>⑥</sup> ヨリ来状 駒込へ出状
六月十八日	晴	夜雨
六月十九日	雨	風 山崎忠ヨリ来状 教文館ヨリ原稿ヲ誤送ス、村田「勤」へ転送 <sup>⑦</sup> 安部立郎へ出状（小包）
六月二十日	晴	山崎忠へ出状
六月二十一日	晴	アズバンへ出状 同志社、山下ヨリ来状 岩沢新平 <sup>⑧</sup> 来訪
六月二十二日	曇	山下、東亜協会 <sup>⑨</sup> へ出状 徳岡松雄 <sup>⑩</sup> 来訪
六月二十三日	晴	
六月二十四日	晴	岡田衍平、同恒輔ヨリ来状 山崎鉄妻来訪
六月二十五日	晴	村井、浦口、安野ヨリ来状 村井、岡田衍へ出状 長野来訪
六月二十六日	曇	岡田恒、安野へ出状

六月二十七日 雨 安部来訪 鈴木醇ヨリ来状

六月二十八日 雨

六月二十九日 雨

六月三十日 雨 入浴<sup>①</sup>

(1) 安部立郎(一八八六—一九二四)は川越中学校第一回卒業生。私立川越図書館を設立したが三七歳で早逝した。増野の入院後、「知己門弟一同で若干の金額を拠出して、先生静養の資の一端にもと御送りした」(「病床に於ける増野先生の思出」『筆華舌英』)とある。五月二〇日付の趣意書の発起人「前原「仙次郎」校長、岡本「定」、和田「弘基」、中「二十」、篠原「豊州」、諸先生と、岡田「恒輔」、岩沢「新平」、鳥越「錦三」、松下「揆」、渡辺「研三」、平野「弥作」、発智「神太郎」、山口「政二」、間坂「哲太郎」、石山「喜一」、安部「立郎」であった。川越町有志には元入間郡立中学校教員で長男が第六回卒業生だった喜多欣一郎が呼びかけ、喜多町綾部利右工門、高沢町伊藤長三郎(のち川越町長)、志義町山崎嘉七(亀屋店主)、川越メソジスト教会牧師山之内庫之助<sup>くらのみすけ</sup>など、各町内の有力者三九名が見舞金を拠出した。第六回卒業生までを含めて、賛同者は一四四名だった。なお、この前後には発起人青木要吉・岸本能武太・浮田和民・松浦政泰・村井知至名で入院費の「御同情依頼」が出されている。詳細は『増野悦興研究』第九章第二節に記した。

(2) 和田亀之助は埼玉県第三中学校(埼玉県立川越中学校)初代教務主任(教頭)。増野とともに新設中学校建設に尽力した。写真の愛好家で、当時の校舎や増野一家など貴重な記録が残されている。増野が埼玉県から「休職」命令を受け、川越を去ると一カ月間校長事務取扱となった。

(3) 発智神太郎は川越中学校第三回卒業生。

(4) 青山殖は川越中学校第三回卒業生。

(5) 前原仙次郎は川越中学校第三代校長。増野への見舞金発起人代表。「前本校長増野悦興君を悼す」(川越中学校学友会『会報』第九号、一九二二年三月)を寄せた。

(6) 乙女は前年七月～二月の半年に七回来訪している。入院後も見舞いをしてることから二人の異母妹のうちの一人の可能性が高い。

(7) 村田勤（一八六六～一九二二）は牧師、翻訳家。増野の逝去後はケールンの著作の翻訳を引き受けているので、転送したのは何らかの翻訳原稿だった可能性がある。

(8) 岩沢新平は川越中学校第一回卒業生。のちに岩沢は増野の倫理の授業を回想しており、「講義が実に立派で私は今もノートを保存して居ります」（母校創立当時の思い出）と回想している（『増野悦興研究』三四六頁）。ご遺族にお訊ねしたが、残念ながらノートは確認できないでいる。

(9) 東亜協会には晩年まで会費を納入して、『東亜の光』を購読していたと思われる。成民会や丁西倫理会での中島力造、深作安文らとの交友からか。

(10) 徳岡松雄はのち台北帝国大学の農芸化学教授で、土壤肥料学者。学生時代に増野がかつて自宅に開設した瑞豊塾の塾生だったと考えられる。

(11) 入浴の記述は三年間では初めてで、よほど暑さが堪えていたのであろう。

七月一日	曇	山崎忠ヨリ来状	山崎へ出状	山崎ハツ来訪
七月二日	雨	岡田、三笠来訪		
七月三日	雨	タイムス、公平へ出状	矢部来訪	歎三(?)、西尾「幸太郎」 <sup>(1)</sup> ヨリ来状
七月四日	雨	公平、ロペデルヨリ来状	ロペデル、村井、杉浦へ出状	
七月五日	晴	安部、宮内来訪		
七月六日	晴	断髪	村井ヨリ来状	
七月七日	晴	坂本ヨリ来状	坂本、同志社へ出状	杉浦来訪
七月八日	晴	西尾へ出状	杉浦来訪	

七月九日	晴	妹尾ヨリ来状
七月十日	晴	九十度
七月十一日	晴	安部ヨリ来状
七月十二日	晴	安部へ出状 岸田荒太郎、三宅龍太郎、タイムスヨリ来状
七月十三日	晴	小久保来訪
七月十四日	晴	夜驟雨
七月十五日	晴	
七月十六日	晴	午後驟雨 山崎ハツ、岸本夫婦来訪 岡田恒ヨリ来状
七月十七日	晴	福田フメヨリ来状 駒込へ出状
七月十八日	晴	
七月十九日	晴	山下、岡田へ出状
七月二十日	晴	
七月二十一日	晴	<span style="border: 1px solid black; padding: 2px;">土用</span> 山崎忠来訪
七月二十二日	曇	乙女ヨリ来状 乙女へ出状
七月二十三日	曇	夜雨
七月二十四日	晴	安部立来訪
七月二十五日	雨	夜半暴風雨 南波ヨリ来状 南波へ出状
七月二十六日	晴	

七月二十七日	晴	西尾ヨリ来状
七月二十八日	曇	
七月二十九日	曇	
七月三十日	雨	都屋へ出状
七月三十一日	曇	西尾来訪
八月一日	晴	
八月二日	晴	平野、畑母「もと」 <sup>(1)</sup> ヨリ来状 乙女へ出状
八月三日	雨	畑母へ出状
八月四日	雨	坂本ヨリ来状
八月五日	晴	図書会社へ出状 三宅ヨリ来状
八月六日	晴	安部へ出状

(1) 西尾幸太郎（一八六八～一九四二）は当時日本組合基督教会の平安教会牧師で、『日本組合教会便覧』の編集担当者だった。妻は増野咲子の妹テルで、京都の自宅には咲子と長男肇が寄寓していた。本『日記』末尾の「人名簿」に「×京都室町十条上ル 増野肇 安房北条八幡 熊沢氏方 安部磯雄」とあり、西尾の自宅と安部磯雄の避暑地の住所が記載されている。当時は、安部磯雄を介して西尾と咲子への連絡がなされていた。安部は、増野君は「肇様には面会いたし度につきも」、貴姉には「絶対的に面会する事を欲せぬとの事に御座候」（一九一一年八月二〇日付増野咲子宛安部磯雄書簡『増野悦興研究』五〇五～五〇六頁）としていた。長く別居を通していた咲子に増野は不満を募らせていた。

八月七日	晴	桜井へ出状 安部間ヨリ来状
八月八日	晴	立秋 坂本、三宅、安部間、岸本へ出状 桜井ヨリ来状
八月九日	雨	安部ヨリ来状
八月十日	雨	タイムスヨリ来状
八月十一日	晴	浦口来訪
八月十二日	晴	三宅龍太郎ヨリ来状
八月十三日	晴	
八月十四日	晴	腹痛 <sup>②</sup>
八月十五日	晴	中山和助 <sup>③</sup> へ出状
八月十六日	晴	風 安部ヨリ来状 安部、西尾へ出状
八月十七日	晴	ロブデルヨリ来状 ロブデル、駒込へ出状 山崎忠、村井義子 <sup>④</sup> 来訪
八月十八日	曇	浮田「和民」 <sup>⑤</sup> 、松浦「政泰」 <sup>⑥</sup> 、青木「要吉」 <sup>⑦</sup> 、高野へ出状
八月十九日	曇	高野ヨリ来状
八月二十日	雨	
八月二十一日	晴	地震 甲藤ヨリ来状
八月二十二日	曇	
八月二十三日	晴	甲藤、和田へ出状 同志社ヨリ来状
八月二十四日	晴	岸本、三宅ヨリ来状 岸本、都屋へ出状 鈴木ノ從卒来訪

八月二十五日 晴 安部立郎来訪  
 八月二十六日 晴 岸本武夫来訪  
 八月二十七日 晴 断髪 岸本へ出状  
 八月二十八日 晴 岸本ヨリ来状 安部へ出状  
 八月二十九日 晴  
 八月三十日 晴 西尾ヨリ来状 基督教世界、<sup>(8)</sup>村井へ出状  
 八月三十一日 晴 乙女、村井ヨリ来状 乙女へ出状 安部来訪

- (1) 畑もと(一八五三〜一九三九)は多度津藩次席家老畑平学(一八二七頃〜一八八四頃)の妻、長女サク(咲子、一八七五〜一九五三)の母。明治維新後、平学は香川県豊田郡長に就任する矢先に反对派に襲われて負傷し、他界する。三歳で六人の子らと残されたものは再婚話を断り、一八八八年頃、今治教会牧師伊勢(横井)時雄の説教に感化され、神戸の英和女学校に入学させたサクのあとを追うように、神戸女子伝道学校に入学し、伝道師の道を歩む。その数奇な半生については、のちに増野が紹介をしている(「予が大説教者と思ひし人」『成民』第一二二号、一九〇八年九月)。詳細は『増野悦興研究』第二章補論(一)に記した。
- (2) 腹痛と記すのは珍しい。前々年一月二日に「夜来下痢、教会ヲ休ム」(『懐中日記』第廿二号)、前年八月二七日に「浣腸ヲナス」(『懐中日記』第廿三号)とあり、それ以来である。
- (3) 中山和助は加部巖夫編の旧津和野藩主亀井茲監伝『於<sup>おどろがなか</sup>梓<sup>おどろがなか</sup>呂我中』(「おどろがなか」は亀井茲監の歌からの引用)の出版元(一九〇五年)である。
- (4) 村井美子は村井知至の妻。村井は増野支援呼びかけの発起人として、寄せられた義援金の会計を担っていた。夫からの伝言を兼ねての見舞いだと思われる。
- (5) 浮田和民(一八六〇〜一九四六)は同志社英学校の第一回生。当時は東京専門学校教授で安部磯雄らと早稲田大



九月一日 晴 涼 村井へ出状  
九月二日 晴 二百十日 浮田、平野来訪  
九月三日 晴 岸本、日本生命ヨリ来状 岸本へ出状  
九月四日 晴  
九月五日 雨  
九月六日 雨 波多野へ出状  
九月七日 晴 矢部、山崎来訪 乙女、岡田へ出状 タイムスヨリ来状  
九月八日 晴 同窓会ヨリ来状 同窓会、木山昌一へ出状  
九月九日 晴 浦口、公平ヨリ来状 浦口、公平へ出状

学 of 政治学の基礎を築いた。雑誌『太陽』の編集主幹を兼ねて繁忙だったが、安部磯雄・岸本能武太の依頼に応じ  
て『基督教新聞』以来の知己として、丁酉倫理会員の仲間として、増野の支援発起人となったと思われる。増野の  
追悼会では追慕演説をした（『増野悦興研究』四六三頁）。

(6) 松浦政泰（一八六四～一九一九）は同志社女学校教頭時代に大阪基督教徒青年会の同志として、『基督教青年』  
第二号に「青年会の大団結」を寄せて以来の旧友。一九〇一年からは日本女子大学校教授として女子中等教育に尽  
力し、増野も女子教育論で共鳴していた。増野の入院に際し、安部磯雄らの呼びかけに応じて支援の発起人となった。  
(7) 坂齋（青木）要吉（一八六七～一九三八）は一八八六年三月、増野ほか七名の仲間と同志社英学校を連袂退学し  
て以来の朋友。増野の入院に際し、安部磯雄らの呼びかけに応じて支援の発起人となった。

(8) 『基督教世界』は大阪の基督教世界社から発行されていた。前年三月五日に「世界社、宇佐美ヲ訪ヒ」（『懐中日記』  
第廿三号、前掲『同志社談叢』第四二号掲載）とあり、同誌をこの時期まで購読していた。

九月十日	雨	
九月十一日	雨	タイムス、アズバンへ出状
九月十二日	雨	
九月十三日	曇	ケールン、ロブデル来訪
九月十四日	晴	
九月十五日	晴	夜雨 岡田恒ヨリ来状
九月十六日	晴	松尾来訪 西尾ヨリ写真来ル <sup>①</sup>
九月十七日	晴	福田フメ来訪 西尾、村井へ出状
九月十八日	晴	公平へ出状
九月十九日	晴	
九月二十日	晴	三宅、平野ヨリ来状 三宅へ出状 山崎忠来訪
九月二十一日	曇	夜雨 小崎子息 <sup>②</sup> 来訪 ロブデルへ出状 村井ヨリ来状
九月二十二日	雨	三宅ヨリ来状
九月二十三日	晴	タイムスヨリ来状 村井へ出状
九月二十四日	晴	〔秋季皇霊祭〕 福田来訪
九月二十五日	雨	
九月二十六日	雨	タイムスへ出状
九月二十七日	曇	

九月二十八日 晴 体温昇ル<sup>(3)</sup>

九月二十九日 晴

九月三十日 晴

(1) 写真は長男肇だと考えられる。

(2) 小崎子息は小崎弘道(一八五六～一九三八)の名代として見舞いであろう。増野は東京一致神学校(明治学院の前身)時代に教師だった小崎弘道の勧めで同志社英学校に転学したと推測できる(『増野悦興研究』七四、八四頁)。

(3) 体温が上がり、いよいよ体調が悪くなくなったことがわかる。

十月一日 曇 安部へ出状

十月二日 晴 夜雨 山口利作、アズバンヨリ来状 山口へ出状

十月三日 晴 夜雨 アズバン、ケールンへ出状<sup>(1)</sup> 坂本ヨリ来状

十月四日

十月五日

十月六日

十月七日

十月八日

十月九日

十月十日<sup>(2)</sup>

十月十一日

十月十二日

十月十三日

十月十四日

十月十五日

十月十六日

十月十七日

十月十八日

〔神嘗祭〕

午前二時二十七分永眠 「妻増野咲子記入か」<sup>(3)</sup>

(1) アズバン、ケールンへ出状が絶筆となった。日本同仁基督教会の米国人宣教師団からの精神的・経済的支援は計り知れない。増野の書簡は現時点では四通しか発見できていない。

(2) 安部立郎は、この日危篤の報が入り、病室に駆けつけると昏睡状態だったが、「よく来た。もう御別れだ。早く川越に帰って、皆に宜敷言ふて呉れ」と明晰に一言された（病床に於ける増野先生の思出）『筆華舌英』と回想している（『増野悦興研究』四六二頁）。

(3) 咲子は夫没後に岡田恒輔宛に、「後事は安部（磯雄）氏はじめ友人等にお任せ致して安心致し此の様に安らかに死ねるは実に有難い思へば感謝の生涯だ」と云ひつゞけ終りの三日ばかりは私に讃美歌を唱はしつゞけ祈りつゞけ申候臨終は何の苦痛も無之実に安らかに眠る如く息を引き取り申候」と書き送っている（『増野悦興先生伝』『筆華舌英』）『増野悦興研究』四六三頁）。その後は苦楽を共にした夫については何も記していない。

金銭支出簿			28.	三河屋	3.000
月日	摘要	円銭厘		[計	40.840]
1. 1.	公平小使	.500			
4.	書換料	.600	3. 1.	公平小使	.500
9.	駒込へ	2.000	7.	駒込へ	2.000
16.	公平小使	.500	16.	公平小使	.500
19.	駒込へ	4.000	19.	駒込へ	3.000
20.	公平月謝	.600	19.	公平月謝	.600
22.	点灯料	.360	20.	点灯料	.360
23.	米屋	2.000	21.	租税	6.350
24.	租税	6.350	23.	米屋	2.000
25.	家賃	9.000	25.	シャツ	.570
29.	駒込へ	3.000	26.	家賃	9.000
29.	公平バッチ	.500	29.	駒込へ	2.000
31.	三河屋	4.000	30.	北文館	1.160
31.	北文館	.285	31.	八百屋	1.900
31.	肉屋	2.350	31.	新聞	.480
31.	新聞	.510	31.	肉屋	2.170
31.	車屋	.250	31.	三河屋	3.670
	[計	36.805]		[計	36.260]
2. 1.	都屋	4.500	4. 1.	公平小使	.500
1.	公平小使	.500	8.	駒込へ	2.000
7.	タイムス	6.000	8.	タイムス	6.000
9.	駒込へ	2.000	19.	日本生命	2.800
11.	公平薬	.400	19.	駒込へ	3.000
16.	公平小使	.500	24.	新聞	.270
19.	駒込へ	3.000	26.	米屋	3.000
20.	公平月謝	.600	28.	家賃	5.000
20.	福音新報	.700	28.	北文館	.200
20.	点灯料	.360	30.	八百屋	1.020
27.	家賃	9.000	30.	乳屋	.840
28.	八百屋	2.500	30.	肉屋	1.310
28.	北文館	.180		[計	25.940]
28.	米屋	3.000			
28.	新聞	.480	5. 1.	公平小使	.500
28.	駒込へ	2.000	10.	乳屋	.360
28.	肉屋	2.120	11.	駒込へ	.500

増野悦興の晩年の『日記』と日本同仁基督教会（三）（滝澤）

14.	肉屋	.800	31.	入院料	8.250
14.	小久保	3.000	31.	新聞	.480
16.	三河屋	9.000		[計]	40.780]
17.	家賃	.400			
17.	米屋	2.000	8. 1.	タイムス	12.000
17.	八百屋	.700	2.	公平へ	1.000
17.	車屋	1.250	3.	都屋	3.750
17.	内藤	.500	10.	入院料	7.500
19.	駒込へ	1.000	17.	同志社	2.000
19.	公平へ	8.000	17.	駒込へ	1.500
20.	新聞	.190	18.	高野へ	10.000
20.	入院料	3.000	20.	入院料	7.500
31.	入院料	8.250	30.	タイムス	6.000
31.	新聞	.180	30.	日本生命	2.800
31.	都屋	4.500	30.	基教世界	1.000
31.	北文館	.150	31.	入院料	8.250
	[計]	44.280]	31.	新聞	.630
				[計]	63.930]
6. 1.	日本生命	2.800			
7.	タイムス	6.000	9. 7.	駒込へ	.600
7.	公平へ	1.000	10.	入院料	7.500
10.	入院料	7.500	11.	タイムスへ	6.000
16.	印刷代	1.000	18.	駒込へ	1.400
17.	駒込へ	1.500	18.	駒込へ	1.500
18.	都屋	25.000	20.	入院料	7.500
20.	入院料	7.500	26.	タイムスへ	8.000
22.	東亜協会	1.000	30.	入院料	7.500
30.	入院料	7.500	30.	新聞	.300
30.	新聞	.300		[計]	40.300]
	[計]	61.100]			
				[1年間合計]	
7. 1.	山崎へ中元	1.000	1.	36.805	
3.	タイムス	12.000	2.	40.840	
3.	公平へ	2.000	3.	36.260	
10.	入院料	7.500	4.	25.940	
17.	駒込へ	1.500	5.	44.280	
20.	入院料	7.500	6.	61.100	
21.	シャツ	.550	7.	40.780	

8.	63.930	
9.	40.300	
合計	390.235	[1911 (明治44)]

[定期支出]

東亜協会	半年	1円
家賃	1月	9円
日本生命掛金	3月	2円80銭

人名簿

×小石川区白山御殿町110	竹井与平方 増野公平
牛、早稲田町5	渡辺書店
京都川端三条上ル	徳岡 英
福岡県鞍手郡勝野村上小竹	岸田荒太郎
×京都室町十条上ル	増野 肇
安房北条八幡 熊沢氏方	安部磯雄

売品控		円
5. 11.	夜具、蚊帳	6.000
11.	道具類	3.500
11.	書画	.500
12.	洋服	5.000
15.	洋服	1.500
15.	道具類	5.500
15.	書籍	5.500
18.	雑品	8.200
	[計]	35.700]

雑録

貯金通帳番号 いにの02806

## 解題

第廿四号（一九一一年）の『日記』も、人名については姓のみで名前が分からず、現時点では人物を特定できない部分が多くある。増野はこの年、病床生活が続き、五月には神田駿河台の東洋内科医院（高田病院）に入院し、秋には帰らぬ人となる。このため、行動が狭まり、記載内容も乏しく、無記入の日も多い。最後の書き込みは一〇月三日で、同月一八日の死去まで二週間以上空白となる。したがって、『日記』から読み取れるこの時期の日本同仁基督教会の動向は少ない。そのうえで、以下、一九〇九年から三年余の日本同仁基督教会の動向を振り返りつつ、増野の日常生活について解説する。

## 日本同仁基督教会の動向（三）

昨年、『日記』第廿三号（一九一〇年）翻刻の解題で触れたように、米国のケンブリッジにあるハーバード神学校図書館に一九〇九年一月の *The Universalist Leader 12* が保管されていることがわかり、そのごく一部分の翻刻を行った。『ユニバーサリスト・リーダー』は米国ユニバーサリスト教会本部の週報である。ブラックマー・ホームの責任者だったキャサリン・M・アズバンの自伝『夢が実を結ぶまで—ブラックマー・ホーム二十年の物語—』（広瀬文枝訳、キリスト教同仁社団、一九八六年）には記事が引用されているが、日本ではユニバーサリズムの研究そのものがあまりなされていないため、広く知られていない。一八九七年一二月に創刊された、ボストンとシカゴで発行された年間二ドルのこの週報の書誌については現在調査中である。

今回送っていただいた週報は二〇頁分で、スキャンデータのため、綴じ代部分が判読できず、翻訳は約四割にとど



まるが、宣教師団などからの報告は、日本におけるユニバーサリズム伝道の一九〇九年段階での状況が記されている。内容は次のとおりである。

### 『ユニバーサリスト・リーダー』

『ユニバーサリスト・リーダー』[指導者] 第12巻第48号 1909年11月27日 「私たちの日本教団」表紙 ユニバーサリスト指導者・私たちの日本教団 写真・ブラックマー・ホームの仲間 ポストンとシカゴで発行 年間二ドル 1頁 ユニバーサリストの信仰告白と交わりの条件・主張

6～8頁 [1510～1512] 日本同仁基督教会・宣教師団・日本宣教師団への事務局からの呼びかけ I・M・アトウツド、事務局

8～9頁 [1512～1513] 日本宣教師団に期待されること 牧師G・I・ケールン、D・D・

10～11頁 [1514～1515] 結果はどうか ミスM・A・ハザウエイ

11～12頁 [1515～1516] 日本名の変更 N・L・ロブデル

12頁 [1516] 晩香寮 キャサリン・M・アズバン

12～13頁 [1516～1517] 東京での活動

13～14頁 [1517～1518] 静岡での活動

14～15頁 [1518～1519] ブラックマー・ホームの一週間 M・アグネス・ハザウエイ

15～16頁 [1519～1520] 名古屋教会での夏の活動 牧師長野直一郎

16頁 [1520] 静岡教会での夏の一週間 牧師伊藤仙峰

17頁〔1521〕

ミセス広岡浅

17～18頁〔1521～1522〕

私たちの父の家での夏休み 牧師増野悦興

18～19頁〔1522～1523〕

日本は何を最も望んでいるか ミセス広岡 大阪・日本

19～20頁〔1523～1524〕

日本軍将校の宗教的経験

20頁〔1524〕

ある日本人外科医の宗教的経験

20～21頁〔1524～1525〕

ある出来事 アナ・M・ケールン

21～22頁〔1525～1526〕

素敵なダンス レオラ・R・ロブデル

22～23頁〔1527～1528〕

日本宣教師団報告 G・I・ケールン、N・L・ロブデル、M・アグネス・ハザウエイ、キャ

サリン・M・アズバン

このうち、注目したいのは、アトウッド「日本同仁基督教会・宣教師団・日本宣教師団への事務局からの呼びかけ」、ケールン「日本宣教師団に期待されること」、ロブデル「日本名の変更」、ケールン「東京での活動」、「ロブデル」静岡での活動」、長野直一郎「名古屋教会での夏の活動」、増野悦興「私たちの父の家での夏休み」、ケールン、ロブデル、ハザウエイ、アズバン「日本宣教師団報告」である。

ニューヨークのユニバーサリスト教会事務局のアトウッド「日本同仁基督教会・宣教師団・日本宣教師団への事務局からの呼びかけ」は、特集「私たちの日本教団」18頁の総論で、日本宣教師団の報告から活動内容を概括し、アメリカ国内の信徒に日本宣教師団への献金を呼びかけている。

「呼びかけ」の概要は次の通りである。

一〇月一日から始まる総会年度の、事務局から各教会への最初の呼びかけは、日本のユニバーサリスト宣教師会への呼びかけである。事務局や各教会が採用しているカレンダーでは、一月は特に日本への献金の月とされている。(中略) 一月に他の用事がある教会の便宜を図るために、日本への献金期間に二月も加えられた。この二カ月間に、日本宣教師団の会計に十分な結果がもたらされ、要求された全額が年内に確保されることが道義的に保証されることが期待される。もちろん、宣教のための献金の要求には期限はなく、それが受け取られるまでは、どの教会も常に期待されている。デトロイト総会は、今年の日本宣教師団のために一万ドルを教会に要請することを決議した。(中略) 日本宣教師団の大きな収入源は、常に宣教に関心を持つ個人の方からの贈り物である。この「呼びかけ」は、彼らにも、教会にも、そしてすべての人に向けられている。「孤高のユニバーサリスト」の多くは日本宣教師団に深い関心を持っている。

*The Universalist Leader* の (Japan Number) 「日本特集号」を発行する目的は、東洋のユニバーサリスト教会の活動やプロジェクトを私たちの教会や人びとに知ってもらうことである。私たちがこのような事業の顕在化において依拠する原則は、人びとが知れば、人びとはそれを実行に移すということである。その結果、私たちの信仰が証明されるようにしよう。

日本での伝道は、米国内の各地の教会員からの献金で支えられているが、その集金は決して安易なものではなかったことがうかがわれる。

「日本同仁基督教会・宣教師団」では、Y・増野の名が散見される。

「日本の教会とアメリカの教会の最大な違いは、アメリカの教会には、慣習や熱心な伝統の力で支持を得ている礼拝者が半数いるのに対し、日本の教会ではそのような礼拝者を確保できていないことだ」と、故ケイト氏「牧師」は未発表論文のなかで述べている。

増野氏は、他のキリスト教徒よりも神の父性を強く信じているユニバーサリストが、熱心に祈るキリスト教徒の幹として知られるようになったときに、他のキリスト教徒に正しく理解されるようになるだろう、と論文に書いているが、その理想をみんなが評価できるようになることを注目してほしい。

あるいは、次のように記されている。

増野氏は、論文のなかで中央教会での祈祷会の価値を強調している。ケールン博士は、この集会は私たちの教会生活を形成する上でとても貴重であることが証明されていると言っている。最初は出席者が少なかったが、徐々に増えてきている。

日本でのプロテスタント・キリスト教各派の伝道状況を次のようにまとめている。

日本でのプロテスタント・キリスト教の誕生半世紀が経過した最近の祝賀会に関連して、日本のプロテスタン

トの現状について、次のような統計があることは興味深い。教会員六〇四五〇名、受洗幼児及び仮受洗者一四一〇名、日本人宣教師五五八名、日本人助教師の男性五三八名、女性三三七名、外国人宣教師のうち既婚三三八名、未婚男性三七名、未婚女性二五九名、組織された教会五七九、説教場九五六、自治教会五四一、完全独立教会一六九、教会の建物二九一、日曜学校一一五九、その生徒八七〇〇三名、過去一年間の成人の受洗者七四四九名、幼児の受洗者九三九名、信仰告白の確認八二三名、宣教師の給与を含む外国の委員会による支出金一六一五九三ドル、日本の教会への募金一二九七四九ドル、宗派別で見ると、会衆派の立場から過去一年間の会員数、自立教会数、大人の受洗者数を読み取ることができる。長老派とオランダ改革派との連合は、会員数では会衆派にやや勝るが、大人の洗礼者の数では下回っている。次いで、会員数は聖公会、メソジスト、バプテストの順である。

「宣教師団」は次のような構成である。

- G・I・ケールン DD 牧師 総監督 東京市麴町区土手三番町一五番地  
キャサリン・M・アズバン女史 東京市小石川区高田老松町五〇番地 ブラックマー・ホーム  
M・アグネス・ハサウエイ女史 AB 東京市小石川区高田老松町五〇番地 ブラックマー・ホーム  
N・I・ロブデル BD 牧師 書記・会計 静岡市大岩七七九番地  
日本人の同僚

長野「直一郎」牧師 名古屋市東片羽一丁目二番地

増野〔悦興〕牧師 東京市麹町区飯田町七丁目五番地（中央教会）

伊藤〔仙峰〕牧師 静岡市裏一番町二五番地

佐藤〔潔〕牧師 東京市麹町区飯田町七丁目五番地

「 」「うめ、」「 」とみ幼稚園の先生たち 東京市〔小石川区高田老松町五〇番地〕ブラックマー・ホーム

そのうえで、「当面のミッシヨンの必要性」として、次のことをあげている。

ブラックマー・ホームでの仕事のために訓練される若い女性

静岡に教会堂を

ブラックマー・ホーム基金の完成

年間収入の増加

日本宣教への関心の高まり

増野の他界は、この特集記事が出てから二年後である。その前後の東京〔飯田町同仁教会（麹町区飯田町）〕での伝道的一端を『読売新聞』が左記のように報じている。

1907 1・13 本日の予定 ユニヴァサリスト教会（飯田町）午前十時 神の恩恵 赤司繁太郎氏

2・3 本日 ユニヴァサリスト教会（飯田町）午前十時 需めに称ふ能力 赤司繁太郎氏

- 成民会 (牛込袋町教会) 午後二時 未定 江原素六氏 学問の苦楽 増野悦興氏  
9・22 本日 ユニヴァサリスト教会 (飯田町) 午前十時 耶蘇の人生觀 赤司繁太郎氏  
午後七時 樂天的生活 山路五十雄 人種問題及其解決 村山  
重義
- (1909) 1910は『増野悦興日記』第廿二号、同第廿三号に記載がある。前掲『同志社談叢』第四一号、同第四二号に掲載)
- 1910 6・5 宗教の会…基督の基督教 増野悦興 (午前十時)  
未だ此人の言し人あらず 松尾音次郎 (午後七時)
- 11・13 日曜集会 午前十時 欣然たる態度 佐藤潔  
午後七時 理と知と美 松尾音次郎
- 11・27 日曜集会 午前十時 基督と時事問題 松尾音次郎  
午後七時 時と道德の關係 松尾音次郎
- 1911 1・15 日曜集会 午前十時 暗中歩行難 松尾音次郎  
午後七時 勇敢なるヨシユア チールン「ケールン」
- 1・22 日曜集会 午前十時 信仰の意味 松尾音次郎  
午後七時 講演 ケールン
- 2・5 日曜集会 午前十時 不平等の意義 松尾音次郎  
午後七時 詩篇作者 ケールン
- 2・11 日曜集会 午前十時 説教 松尾音次郎

			午後七時	英語説教	ケールン
	2・26	日曜集会	午前十時	基督教を師と仰ぐ	松尾音次郎
			午後七時	歴史に於ける神	ケールン
	3・26	日曜集会	午前十時	松尾音次郎	
			午後七時	ケールン	
	4・9	日曜集会	午前十時	人格の勝利	村田勤
			午後七時	吾人の修養法	村田勤
	4・30	日曜集会	午前十時	囚はれたる思想	ケールン
			午後七時	宗教に入るの門	長野直一郎
	10・1	日曜集会	午前十時	至著	松尾音次郎
1918	12・1	日曜集会	午前十時	一にならん為	笠谷保太郎
			午後七時	教罪の福音	笠谷保太郎
1920	1・17	名古屋市に婦人の文化講座が設置されて二月開始、同仁教会牧師長野直一郎が幹事			

### ブラックマー・ホーム

ブラックマー・ホームの運営と東京・静岡・名古屋・秋田教会での伝道がこの時期の日本同仁基督教会の中心活動であり、信徒はなかなか増えなかったものの、増野の静養・入院・他界は活動に支障をきたしたであろうが、布教活動は熱心に続けられている。



ブラックマー・ホームの責任者アズバンは、一八九五年に三五歳で日本に着任した。翌九六年に婦女子救済施設ブラックマー・ホームを設立し、その後二七年間にわたり米国ユニバーサリスト教会員として日本の貧しい婦女子救済と女子教育に尽力して、生涯をユニバーサリズムの伝道に捧げて祖国に帰らずに一九二五年に亡くなった。増野が他界した翌年の一九二二年五月二日の『朝日新聞』がブラックマー・ホームを次のように報じている。

▲ブラックマーホーム 小石川高田老松町に八年以前草を分けて雑司ヶ谷界限に目馴れぬ西洋館を建てたミス、アーズバンは米国の婦人で同仁教会伝道会社より派遣され兼てブラックマー老人の喜捨する膨大の金額を以て建てた女塾の監督者として選ばれた人である同女史の目的は女子大学設立の上は該校に通学すべき生徒の便宜を計る必要があるべくと既に収容した生徒を引連れて女子大学の近くに居を朴し傍文明的の家庭生活を味は、セ特に英語を習得せしむ可き機会を与へ様と言ふのであつた、以来着々其目的を達して当時は女史親ら舎監となり主婦となつて努めて女子大学の方針に則つて塾生を修養して居られる、数は二十名を昇降して居心地よき各室に皆安んじて大学の生徒もまだ年少い小学部の生徒も学業に従事してゐる、外出其他には余り束縛を加へない、朝と夕との食事には女史も共に食卓に就いて談笑の中に食事をするのと夕食後六時半頃には家族一団となつて聖書を読み談話を聴き歌を唱へて修養兼親睦の会とする、自習は各自の室で範意に九時半迄、設備監督共に行届いて居る

米国から派遣されて日本で地道に伝道活動を行った宣教師たちを支えた使命感とはどのようなものだったのか。また、それに共鳴した日本人宣教師の信仰はどう形作られていたのか。それらを知る手がかりが、この特集「私たちの日本教団」の記事から得られる。宣教師団の総監督だったケールン「日本宣教団に期待されること」は、その点で示

唆に富む。

ケールンの主張の要約は次のとおりである。

・ユニバーサリスト日本宣教師団が遭遇しなければならない困難の一つは、アメリカの人びとが「東洋の宗教に囲まれた東洋の地で宣教を行うことが何を意味するか」を、ほとんどの人が知らないことで、「完全に自立したユニバーサリズムの教会が、今後長期にわたって期待される兆候は、今や全くない」のであり、「日本宣教師団が成功するためには、何年にもわたって、アメリカで大規模かつ自由に支援されなければならないことを、決心しておいてほしい」こと。

・「私たちがここにいるのは、建物を建てたり、教会を建てたり、世間に見せられるような外見を作るため」ではなく、「本国よりも教会員の獲得が難しいことを忘れないでいただきたい」こと。

・「どの教会にも、日曜学校で育てられ、教会で育ち、あらゆる面で教会の忠実な支持者であり、その教えの深い印象を人格に刻んでいるにもかかわらず、教会に入会していない人びとがいること」、「それは日本でも同じなのだ。さらに、多くの人びとが数カ月あるいは一年間、私たちの説教の絶え間ない影響の下で、事実上クリスチャンになり、そしてこの帝国のどこか知らない所に、こっそり立ち去る。彼らは、私たちの教会記録に登録されたわけではないが、その人たちには、私たちの教えの印象が常に残っている」こと。

・アメリカほどではないが、「私たちの仕事の価値を決める唯一の基準は教会員である」こと。

・「できるだけ多くの教会員を獲得することが望まれ、そのために私たちは常に働いている」が、「宣教師団に期待されるものは、見えて、触れて、数えられるものとして、前面に出してはいけないということ」で、今の時代

は数字ばかりだが、「もっと良い、もっと信頼できる基準が他にあるはずである」こと。

・宣教団は合理的で霊的な、信仰に満ち強く愛に満ちた福音を宣べ伝えることによって、人びとをクリスチャンとしての思想と生活に導くように努めること、すなわち、人びとがわれらの父を知るように、われらの父が啓示された御子を知るように努めることを期待されている。私たちの特徴的なメッセージである神の普遍的父性、人間の普遍的兄弟愛、キリストの普遍的救世主性、そしてすべての人の最終的な神聖性と幸福は、私たちが教会や説教所を持つているところならどこでも、これら、すべての真理のなかで最も大きなものが宣べ伝えられると期待される」こと。

〔注〕増野悦典『吾徒の信条』では、「神は人類の父である、人間は同胞である、耶穌基督は理想の人である、正義人道は最後の勝利者である」とされている。

・宣教団には、「日本のユニバーサリストが、この福音を愛し、福音に忠実であるように教えられることが期待されて」おり、宣教師やクリスチャン改宗者は「彼らの姿や行動によって人びとを獲得するよう努力することが期待される」こと。

・「人間の目では決して見ることができず、数字で数えることもできない、目に見えない教会が至高とされることは期待される。これらのことごととは、本当に期待されていることであり、本国の人びとの側に、最高の質の高い自己犠牲を要求している」こと。

・「私たちが行っている仕事への絶対的な献身により、宗派や個人のすべての自己利益を忘れてしまう」のであり、「これこそ、本国の教会、そして日本の宣教団に期待される当然のことである。私たちは、これほどまでに質の高い自己犠牲と寛容さを持ち合わせているのだろうか。それは、未来が教えてくれるだろう。このすべての

結果、日本人の生活が向上し、人格が変容していくことをみるのが期待され、「宣教師は、その実現のために最善を尽くそうと試みている」こと。

・「宣教師は日本の時代と思想傾向を研究する学生であり、私たちのユニバーサリストの使命にとって特に好ましいと思われる傾向を利用しようと努めることが期待されている」こと。

・「教育を受けた日本人の間では、保守的な正統派キリスト教の古い宗教性や理不尽さから離れようとする気風がある」ので、より宗教的な枝はユニバーサリズムに、宗教的でない方の枝は、唯物論に流れ込んでおり、「ユニバーサリストの思想が、後者の傾向を阻止し、それを宗教的な道筋に変える力を持つ唯一の信仰を構成している」ことも、同様に真実である」こと。

・「古いものと不合理なものから離れ、二つの枝に分かれるこの一つの傾向は、日本におけるユニバーサリスト教会にとって、可能な限り最大の機会の一つを構成している。こうした偉大な仕事を成し遂げるために、私たち四人の宣教師に何ができるのか」ということ。

・私たちが有能な最高の牧師たちを持つても、「今後一〇年以内に何が達成されるかを語ることは不可能」だが、「日本の宗教生活や思想を将来的に決定する可能性もないとはいえない」こと。

・「日本の宗教生活と思想を決定する者は、東洋の宗教生活と思想を決定する」こと。

・現状では、十分な資金がないので、「今ある範囲でできるだけのことをしなければならぬし、最善を尽くすしかない」こと。

・「この二〇年間、私たちは誤りや失敗、成功とを通して何かを学び、そしてこれから前進していくことが期待されて」おり、「私たちはこのことを、みなさんの贈り物、励まし、祈りの助けによって、また、私たちがユ

ユニバーサリスト教会を日本に呼んだと信じる神の祝福によって、成し遂げたいと願っている」こと。

以上のように、ケールンは日本でのユニバーサリズムの伝道にあたり、①その道が平坦ではないこと、②教会員や教会の建物が増えればよいのではないこと、③日本人との「信頼できる基準」を模索していること、④そのためには、「宣教師は日本の時代と思想傾向を研究する学生」との自覚が大切で、日本人知識人には「保守的な正統派キリスト教の古い宗教性や理不尽さから離れようとする気風がある」ので、唯物論に走らずに「宗教的な道筋に変える力を持つ唯一の信仰」がユニバーサリズムであること、⑤そして最終的には、「日本の宗敎生活や思想を将来的に決定する可能性」のために、最善を尽くしたいこと、⑥それが「東洋の宗敎生活と思想を決定する」ことであるとの展望を示して、⑦そのためにも、本国の信徒の献金・励まし・祈りを願うもので、⑧神の祝福によって、宣教師団は日本での布教を成し遂げたい、としている。

また、ケールンは四人の米国人宣教師団連名の年次報告書「日本宣教師団報告」の末尾で、次のように記している。

私たちが報告しなければならない対外的な施設は大きくはないが、私たちの使命の影響力は、私たちが示さなければならぬ目に見えるものよりもはるかに大きいと感じている。私たちは、外面的な制度の価値を認めながらも、私たちの最大の仕事は、目に見える教会を作ることではなく、将来の日本のキリスト教会を形成するための思想を形成することであると感じている。このことは、本国のユニバーサリスト教会に、私たち特有の自己犠牲の最も優れた精神を求める機会になる。したがって、私たちは、他人の組織の複製を目指すのではなく、私たちの仕事を行うために特別に設計された方法を採用することが必要である。とはいえ、この目的のためには制度が

必要である。それゆえに、私たちは、そのような思想の方向に向かっている私たちのユニバーサリストの教えを、共に日本の人びとに伝えるために、最大限の努力をするつもりである。

このように、ケート (I. Wallace Care) 以来、ケールンらの米国人宣教師団の活動を支えたのは、困難な現実を直視しつつ、高邁な理想を掲げて、外面ではなく内面から、日本人の宗教生活や思想を高めたいとする使命感である。この伝道姿勢こそが、『高貴なる人格』（一九一〇年一月）を掲げて、青年教育を通して、人格の完成と国民道德の確立を希求し続けた増野悦興との共鳴点であった。なお、増野の無二の「主に在る兄弟」（増野「逝ける兄弟」『成民』第一〇号、一九〇八年七月一日）であったケート牧師については、『増野悦興研究』第八章第四節および前掲「日記（二）」（『同志社談叢』第四二号）の解題に記した。

二〇世紀初頭の日本での米国ユニバーサリズム教会宣教師団による伝道は、国内の「正統派」教会からは異端視されつつも、日本の宣教師と共同して「将来の日本のキリスト教会を形成するための思想を形成すること」を目的としていたのである。

### 「同仁」への改名

日本でのユニバーサリズムの布教活動において、増野の最大の功績は「宇宙神教教会」を「日本同仁基督教会」に改名したことである。この経緯をロブデル「日本名の変更」が報告している。これはプロテスタントキリスト教の日本への移入、日本での universe = cosmos = Uchu の理解の変遷、という点で貴重なので全文（筆者訳）を紹介する。

日本名の変更 ロブデル

ごく少数の例外を除いて、日本で伝道活動を行っている教団は、外国語の名称を日本語に翻訳しようとしている。それで、ペリン博士と彼と一緒に来た人びとは、私たちの仕事がこの国で始まったときに、Universalist [万人同胞・万人救済主義者] という言葉を日本語に翻訳するために学者の支援を得た。新しい言葉を作りたいときに、英語を使う私たちはラテン語やギリシヤ語で語源を調べるが、日本人は私たちの言葉でのラテン語やギリシヤ語と同じように、彼らの母語に名前の関係を持っている中国語を使うのだ。そこでこの学者は、Universalist [万人同胞・万人救済主義者] という言葉は単に universe (宇宙) が長くなったものに過ぎないと考え、Universalist [万人同胞・万人救済主義者] や Universal [普遍主義] ではなく、universe [宇宙] や cosmos [宇宙] を意味する中国語の Udu [宇宙] という言葉で表現することにした。そこで、「信仰」という言葉を訳すのに「神教」を加えて「宇宙神教」としたが、これは Universalist [万人同胞・万人救済主義者]、あるいは Universalism [万人同胞・万人救済主義] を意味するはずだが、実際には「宇宙の宗教」を意味する。それゆえ、最近出版された和英辞典では、この言葉を「パンテイズム [汎神論]」や「ユニバーサリズム [普遍主義]」という、一見すると同義語のような言葉として定義している。

こうした場合には、「宇宙神教」という言葉を使わない方がよいと考えられた。これは数年前に決断され、代わりに英語の Universalist という言葉が使われた。この言葉もまた、日本人にとっては外国語であり、書くのも発音するのも難しいため、満足のいくものではないことがわかった。しかも、英語を知らない人には何の意味も伝わらず、長野「直一郎」氏が言うように、ある種のメッセージに適している日本語のようだ。このような状況のなかで、私たちの日本人支援者たちは、私たちの信仰の意味をよりよく表現する新しい言葉を見つけないと強

く願っていた。

この問題は、昨年の春、ケールン博士が来てから真剣に検討された。Universalist 「万人同胞 万人救済主義者」という言葉を文字通りに表現するのは非常に難しいことがわかった。というのも、中国語の語源の組み合わせには一定の規則があり、この言葉をほぼ正確に翻訳するような組み合わせのいくつかは不可能だからだ。そこで、間接的ではあるが、私たちの信仰の存在感を示す言葉を分かりやすく表現できる言葉はないかと話し合った。増野「悦興」氏は、「同仁」という言葉を提案した。この二つの音節には、それぞれ「名」・「公平」、「仁愛」という意味がある。この言葉は、教育のある日本人なら誰でも読んだことのある中国の有名な古典のなかで、すべての臣民を同じように愛した善良な王の、「一視同仁」を指す言葉として使われていることを意味している。それゆえ、「一視同仁」という表現は、我々にとつての Honest Abe 「正直な安部」のように、日本人にとつて特別な意味を持っている。これは利用可能な最良の言葉であると考えられ、それに加えて共通の二つの言葉が追加された。キリスト、クリスチャン、そして協同、宗教集会、教会といった意味で、私たちの教派の国際支部として区別し、メソジスト派や日本の日本派のように、日本における私たちの教会の名前を完全なものにするために、このように準備された。日本同仁基督教会、日本同仁愛基督教会は、すべての母音がイタリヤ語の音であること、子音が英語と同じ名前であることを覚えているならば、同と仁の間をととも長くすることを忘れないようにしてほしい、実際には二つの長さがあり、そうでないとユニバーサリスト教会のための新しい日本語名を発音するのに苦労するだろう。

ここでは、「日本人は私たちの言葉でのラテン語やギリシャ語と同じように、彼らの母語に名前との関係を持っている





REV. Y. MASHINO

School at Itamachi. Giving only one hour a week to the different classes renders it quite impossible to accomplish much. It is something to meet the girls and to try to give them a helpful word outside of the English lesson, but they are of necessity somewhat neglected. Although Thursday afternoon is supposed to be my "at home" time, the fact that at nearly one o'clock I am far from home and near the car line, where it will be easy to do some of the never ending errands, often tempts me to break the rule of etiquette and be "away."

Friday is a sort of catching-up day. The left over work from other days must be done, lessons must be prepared, and hope is always entertained that on this day there will be an opportunity to answer some of the long neglected homelend letters.

Saturday brings the duties of housecleaning, extra callers, preparation for Sunday, and like the Saturday at home, so many unexpected duties crowd in upon us, that Saturday night finds much that is still unfinished work.

This in part is a program for a week at the Home. Every morning there are hours assigned for Japanese study and nearly every morning local correspondence awaits me. Busy the days are from early morning till nine o'clock, and much ought to be accomplished, but work does not count for so great results as at home and I am sometimes discouraged. Still this home is certainly worth while. A peep into the home of one of the girls who has been with us, her sweet motherly ways, her broader views of life, her ability to meet the hard places, prove that her Home training has made what is needed more than anything else, not only in Japan, but in every country, a good wife and mother.

### The Work in Summer at the Nagoya Church

The Rev. N. Nagano

As it may be interesting to our American friends to know how we are spending our time during this summer season, I will write out an account of our doings for the past week.

We decided to hold special Sunday meetings for women and children during the hot season. On the first Sunday in August we began a Bible class especially for young ladies. There were six ladies present, all teachers in the public schools. They are very anxious to make the

most of the summer vacation for the purpose of learning about Christianity. We assembled at eight o'clock rather than ten, the usual hour, as the weather is so hot. I explained the first part of the fifth chapter of Matthew for an hour. It is my intention to give them some conception of the Sermon on the Mount during the summer vacation. After that with the assistance of an organist we had a song service. At that time three young men came in for the regular morning Bible class and joined us in the song service which continued until nearly lunch time.

In the evening in place of the regular meeting for adults we had a meeting for children. As the meeting had been advertised as usual at the gate of the church, the building was nearly filled with children by seven o'clock. There was also a small sprinkling of big sisters, mothers and maids. I opened the meeting by reading from the Bible and offering a short prayer. After that we sang hymn No. 280 ("Awake my Soul, Stretch Every Nerve") which is very familiar to the children. Then Mr. Koizumi, manager of the electric light company, an earnest worker in our church told them an interesting and instructive story which pleased them greatly. Following that two ladies and I sang a trio. We are fortunate in having some good friends among the members of the Congregational church in this city. One of them, Mr. Nishi, was with us on that evening and gave us another good story for the children. Then after a good-bye song we went home.

Monday morning I spent reading with much interest two Christian magazines, and a monthly collection of ethical lectures. After marking the important points of the essays, I sent them to a lawyer who is seeking for normal religious truth. In the afternoon a visitor whom I had met two or three times before, and whom I had found in profound doubt in regard to the meaning of human life, came from a nearby village. He is a young business man and is much interested in Tolstoy's teachings. After talking with him for about two hours regarding liberal Christianity, I gave him an article on Universalism written by Rev. Mr. Mashino and invited the young men to come again.

Early Tuesday morning I took several Christian books to two members of the Pure Talk Society who were going to the seashore for their vacation. In the evening I was visited by Mr. Koidzumi, who talked with me concerning the necessity of establishing a Christian organization for young men in this city. He said that there had been remarkable progress in material affairs in the city, but a corresponding retrogression in spiritual matters. He said that if a Christian denomination would build and equip a house for work among young men that the mayor would certainly give much practical aid to the enterprise. As Mr. Koidzumi is an intimate friend of the mayor, we wish that we could have now 10,000 yen for such a building.

I spent of Wednesday in writing an essay on the subject "Traditional Christianity and the Duty of Liberal Christians." I tried to show how so-called Historical or Traditional Christianity is losing its influence over the educated people, and at the same time to show how eagerly they are seeking after a religion of reason and life.

Thursday was a very hot day. I invited the Sunday school children to play at the pond in the church garden, and before they went home taught them a new song. In the evening I attended a tea-party at rooms of the Christian Friends Society. We discussed plans for a charity meeting to be held this autumn for the benefit of the Okayama Orphanage.

Friday morning the paper announced that a group of Buddhists were about to start a daily paper advocating their principles. I immediately called upon a friend to

Rev. Y. Mashino

The Universalist Leader, November 27, 1909 vol. XII, No. 48, p. 15, [1519]

(ハーバード神学校図書館保管)

る中国語を使う」という言い方で、アメリカ人宣教師が、Universalismを学者（中村正直）翻訳の「宇宙神教会」から増野の提案で「同仁教会」に変更する苦心を伝えている。「同仁」という熟語には、増野の漢籍の素養が活かされておられ、ユニバーサリズムの「万人同胞・万人救済」の教義内容が充分反映されていた。

今回、*The Universalist Leader* 第12巻第48号【実際には第47号】（1909年11月27日）の〈Japan Number〉において、晩年の牧師増野悦興の活動が、アメリカの史料で初めて確認できた。

増野の英文報告書は初出なので、長くなるが全文（筆者訳）を紹介する。

私たちの父の家での夏休み 牧師 増野「悦興」

夏休みを取る人は、山や海の近くの別荘やホテルで過ごすのが一般的だ。このように、人間が作り上げた都市を一時的に離れ、神が創造した自然に触れることで、彼らは体力を回復させる。しかし、今年の夏休みは、一般の人が行くようなところではなく、私たちの父の家で過ごすことが私の運命になった。そして、自然だけでなく、すべてのものを創造された神様に触れることで、より一層、自分の力を取り戻すことができた。実は、夏が近づくとつれ、私たちは八月の飯田町教会の礼拝をどうするかを検討した。そして、最終的に朝の定例説教会をやめて、その時間に祈禱会を開くことになった。こうして、東京に残ってこの祈禱会を引き受けることになった私は、とても楽しく夏を過ごすことができた。ここで、私の日記から各日曜日の集会の記録を引用し、その際に私の話の概略を記すことにする。山へ行った人、海へ行った人は、私より上手に引用できるだろうか。

第一日曜日

アメリカからケールン博士夫妻が到着して二、三日後、飯田町教会の数人のメンバーがブラックマー・ホームのサロンに集まり、この仕事の新しい責任者とその高貴な妻を出来るだけ簡素に歓迎した。その時、ケールン博士は、「あなた方は確かに少数であるが、あなた方一人一人が大きな責任を背負っていることを自覚してほしい。私の国の大きな教会で、何千人もの名前が載っている教会でも、霊的に見れば、本当に少数の会員によって支えられているのだ。だから、みなさんが自分の責任の大きさを痛感し、最善を尽くせば、私たちの教会は必ず繁栄するだろう」と述べた。初日の朝にやってきたのは、ケールン博士があればほど期待していたのと同じ数名の人たちであった。私はとても嬉しかった。私は聖書の「ガラテヤ人への手紙」第4章の6を読んだ。「神はあなたがたの心のなかに「アバ、父よ」と呼ぶ御子の霊を送ってくださいだったのである」。そして、会合を持って次のような話をした。

「私たちは、神は父であると強調しているキリスト教徒の一集団であるのですが、実際に重要なことは、理論だけでなく、実践においても真理を強調することなのです。まず、私たちは正教会の兄弟たち以上に、神は父であると考えているでしょうか。彼らは、自分たちの神学はキリスト中心で、祈るときもキリストを媒介にしてのみ行うと言います。しかし私は、祈りの精神に欠ける人が多いことにしばしば気づいています。神学的立場を神中心主義として、神と直接対話できることを誇りとする私たちは、この祈りの精神を彼ら以上に持つべきなのです。私たちが神を父と考えるかどうかは、主に、祈りたいかどうかで判断されるのではないかと私には思えます。そのことでユニバーサリストは、神に祈る他のキリスト教徒から正しく理解されることになるのです」。

第二日曜日

この教会の老小使さんも教会員である。彼は、その誠実な人柄から、すべての教会員からとても愛されている。彼の実直な性格は、時に大きな利益をもたらし、時に大きな損失をもたらしたようだが、結局は永遠の命を手に入れたのだ。私は次のように彼をいくばくか助けた。「心の清い人たちはさいわいである」「マタイ5章8節」とはキリストの山上の教えの言葉ですよと。山崎「小使さん」兄は学問がないけれども、神の国に適するという点では、学問のある人よりもすぐれている。私共の教会は理性的な教会であるから、学識ある者だけが必要であると考えるのは大間違いである。合理性とは、正直でない合理性は狡猾さに他ならない。山崎兄は、現在も、そしてこれからも長く、私たちの教会の大切な一員である。私たちは、もし必要ならば、彼の現在の地位からの辞任を受け入れるかもしれないが、彼が私たちのグループから外れることは決して望んでいない。彼の人生を手本にして、彼の誠実の徳を養おうではないか。

### 第三日曜日

沖津兄は、最も立派な会員の一人であった。今朝は、前の日曜日に、この礼拝で話をすることを約束していたのだが、前日の木曜日の夜に突然天に召されたのだ。今朝の話題は当然、彼の死についてであり、私は次のように話をした。「今朝、沖津兄が話をしに来られないのは大変残念ですが、私との約束を果たすことをおろそかにしたとは思いません。というのは、兄の突然の死は、私たちにとって貴重な教訓の源となっているからです。私は今、「雄弁は銀、沈黙は金」というこのことわざの真理を悟らずにはいられません。兄の突然の死によって私が得た教訓は、これまでに彼の話聞いて私が彼から得た教訓よりも貴重なものなのです」。そして、軽井沢から葬儀に参列するために帰ってきたケールン博士が、今朝、私たちと一緒にいて、感じたことを話してくれたので、その無言の言葉の一部と思われる考えを指摘した。博士は、現在の世界と未来と呼ばれる世界は、同じ神に

よって支配されている一つの世界であり、同じ神によって支配されている以上、どちらの世界でも同じ法則が支配している、それゆえ、沖津さんのような人がこの地上で立派な人格者と見なされるに値するならば、天においても同様に見なされるに値するにちがいない、と話された。そして、信仰と希望を持って、クリスチャンとしての人生を邁進するように、と促された。

#### 第四日曜日

このように、沖津兄の死から受けた印象は、まだ私たちのなかに残っていたので、私たちは再びその出来事に言及した。前日の日曜日にケールン博士が述べた想いをさらに父なる神に伝えたいと思い、次のように話をした。「そうなのです、現在の世界と私たちが未来と呼ぶ世界は、本当は同じ神によって支配されている同一の世界なのです。この真理に加えて、物質世界と精神世界もまた同じ神によって支配される同一の世界であるという真理も知っておかなければなりません。しかも、私たちの問題点は、物質的な世界にばかりこもって、精神的な世界の存在を忘れてしまうことなのです。それは、精神世界の存在という真理に目覚めた私たちにも必要なことなのです。私たちは精神的な存在であり、動物のように長生きするだけでなく、気高く生きることが特権であることを自覚いたしましょう。残念ながら私たちが時として、「人はパンのみに生きる」と考え、何を食べようか、何を飲もうかと悩むことは残念なことなのです」。続いて、もう一人の私たち数少ない誠実な信者である水平さんが、愛娘を亡くされた時の心境を語ってくれた。

#### 第五日曜日

私は聖書の「ルカによる福音書」24章49と、「使徒行伝」1章14を読み、次のように話した。「イエスが共におられた時には弱く無知だった使徒たちが、イエスが去ってからはなぜ強く聡明になったのでしょうか。それは、

彼らが神に頼るようになり、祈るようになったからです。彼らが祈ったから、神の霊が彼らの上に臨んだのです。神の霊が彼らの上に臨んだのは、彼らが祈ったからです。彼らはイエスの命令に忠実に従い、エルサレムの町に留まったのですが、そこで暇をつぶしたのではないことに注目しましょう。彼らはみな、心を一つにして祈りを続けたのです。私たちの霊的成長の秘訣は、祈りです。私たちの祈りが聞き届けられ、私たちが求めていた神の賜物を確かに受け取ったと確信させられるまでは、新しい仕事を始めない方がよいでしょう。今朝は、休暇を終えて東京に戻ったばかりのケールン博士も、私たちと一緒だった。博士は、「私が去っていくことは、あなた方にとって益になる」というキリストの言葉を引用して、神に頼ることの大切さを高調した。そして、私たちの祈禱会について話を進めて、その成功を祝福してくれた。そのうえで、この会合の成功を祝福して、来年度も週の半ばの夕方に開催することを希望していると私たちに告げた。教会の長老である岡田兄は、頼もしい少数精鋭のリーダーとして、熱心な感謝の祈りを捧げ、その後、全員で主の祈りを捧げた。こうして八月の、とりあえずの仕事は終了した。

増野の英文は、他の日本人宣教師と比べて難解なのだが、夏の五日間の祈禱会で次のような話をしている。

第一日曜日 重要なことは、理論だけでなく、実践においても真理を強調することであり、ユニバーサリストは

神学的立場を神中心主義として、神と直接対話できることを誇りとする。私たちが神を父と考えるかどうかは、主に、祈りたいかどうかで判断されるのではないか。

第二日曜日 山崎「小使さん」兄は学問がないけれども、神の国に適するという点では、学問のある人よりもす

ぐれている。私共の教会は理性的な教会であるから、学識ある者だけが必要であると考えるのは大間違いだ。正直でない合理性は狡猾さに他ならない。

第三日曜日 最も立派な会員の一人であった沖津兄の突然の死から、「雄弁は銀、沈黙は金」という、このことわざの真理を悟らずにはいられない。

第四日曜日 私たちは精神的な存在であり、動物のように長生きするだけでなく、気高く生きることが特権であることを自覚しよう。

第五日曜日 私たちの霊的成長の秘訣は祈りである。

このなかで増野は、①信仰は実践での祈りが大切である、②信仰は学問のあるなしではない、③教会員が突然亡くなって無言になっても日頃の行いはよみがえる、④人は気高く生きることが大切なことを自覚したい、⑤人の信仰＝霊的成長の秘訣は祈りである、と語っている。

晩年の日本同仁基督教会飯田町教会牧師増野は、人は弱きもの、学歴の無いもの、この世から去らなければならぬものであるけれども、気高く生きようではありませんか、信仰心の成長は神に祈ることです、と祈禱会で教会員に話しかけたのだろう。報告からは、大衆に温かく接する伝道姿勢と、心の広い人格と率直に神に祈るキリスト教信仰を大切にしたいと呼びかけたことが汲み取れる。

最晩年の増野は肺患が進行し、先延ばしにしていた負債整理に追い込まれてはいたが、安部磯雄や岸本能武太らの同志社英学校以来の朋友、岡田恒輔らの川越中学校卒業生、ケールン、ロブデル、アズバン、ハサウェイらの宣教師にも見守られていた。「最早我レ活クルニ非ズ基督我ニ在リテ活クルナリ」トノ理想ヲ実現センコトヲ望メリ」（一

九〇九年四月一三日付安部磯雄宛書簡「『増野悦興研究』四九九～五〇〇頁」と決意していた増野悦興は、人生の最後に至って謙虚で敬虔な祈りを身につけて、妻咲子に讃美歌を所望しながら四六歳の生涯を終えた。

東京・静岡・名古屋・秋田教会の動向、ブラックマー・ホームの日常報告などは、紙数もあり、残念ながら割愛する。本来であれば、増野も一部翻訳に携わったケールンの一六冊の著作の解読作業の報告もしなければならぬのだが、後日を期すこととする。なお、昨年報告した「増野悦興の晩年の『日記』と日本同仁基督教会（二）」（『同志社談叢』第四二号、二〇二二年三月、一七七～一七八頁）のケールンの著作一覧は、再調査の結果発行年などに誤りがあったので、修正して再掲をする。

ケールンの著作は以下の、小冊子が一五冊、単行本が一冊、計一六冊となる。

〔小冊子2〕『理想と生活 勝利の生涯』一九〇九年九月二五日（一九二二年に六版）

〔小冊子1〕『進歩的基督教と日本の近代思想』一九一〇年一月八日（一九一四年に七版）

〔小冊子〕『日本将来の宗教』一九一〇年三月二五日 日本同仁基督教本部（一九一一年に四版）一部分〔小冊子1〕と重複

〔小冊子3〕『活宗教の要素』一九一〇年八月二五日（一九一三年に三版）

〔小冊子6〕『思想と品性』一九一〇年一月五日（一九一四年に五版）

〔小冊子4〕『基督教徒となるの道』一九一〇年一月八日（一九一四年に四版）

（一九一〇年一月版には「松尾音治郎<sup>マツノトシロ</sup>」訳とある）

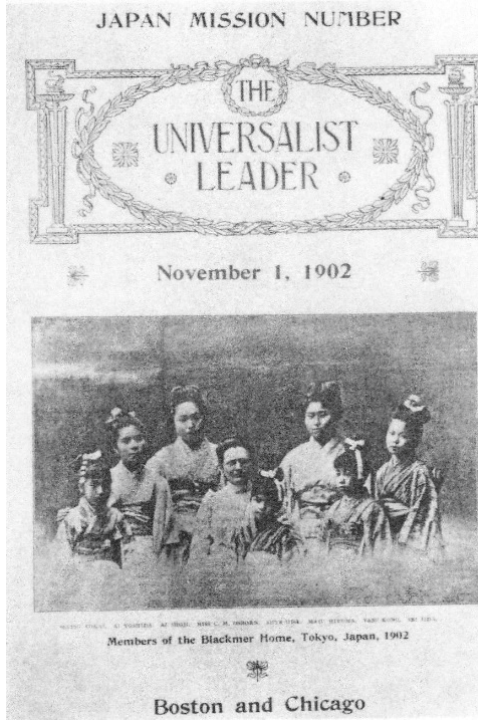
〔小冊子9〕『必勝の教義』一九二二年一月二〇日



- 〔小冊子8〕 『忠君愛国と基督教』 一九一三年一月二八日  
〔小冊子10〕 『聖書の手びき』 一九一三年五月一日  
〔小冊子5〕 『人生の意義及価値』 一九一三年六月五日  
〔小冊子11〕 『醒めよ常に醒めよ』 一九一四年六月一日  
〔小冊子12〕 『神を尋ね索むる道』 一九一五年二月一日（一九一六年に再版）  
〔小冊子13〕 『神の仁徳と悪の存在』 一九一五年三月三〇日  
〔小冊子14〕 『靈魂不滅論』 一九一五年二月一日  
〔小冊子15〕 『子が基督者たるを誇る所以』 一九一六年二月一日（一九一六年に二版）  
〔単行本〕 『活ける宗教の要素』 一九一六年二月九日 村田勤訳 日本同仁基督教会本部  
（奥付で、ケールンは「日本同仁基督教会総理」となっている。表題は「小冊子3」と似ている）  
〔小冊子7〕 『同仁基督教会の要旨並に価値』 一九一〇年二月八日（一九一四年に四版）

著者はオレロー・コーン（ケールン序文）

本解題では、増野『日記』に即して一九〇九年から一九一一年にかけての、日本での米国ユニバーサリスト教会宣教師団の伝道活動と増野との関わりを紹介した。そして、その前後の足跡については、カール・シエラード・シーバグ（Carl Gerard Seaburg, 一九二二～一九八八）編 *Doing Means All People: The Universalist Mission to Japan, 1890-1942* (1978) が、一九世紀末から半世紀間の足跡を簡潔にまとめている。これは同仁キリスト教会九〇周年記念として一九八〇年に『同仁…すべての人に等しく』アメリカ・ユニバーサリスト教会ミッションの日本伝道 一八九



ブラックマー・ホームの人びと（1902年）  
左より 横井まつ、吉田あい、庄司あい、  
ミス・アズバン、飯田すゑ、比留間ます、  
河野やす、飯田せい

*The Universalist Leader* November 1, 1902  
（『同仁』2頁）

○（明治三十三年）〜一九四二（昭和一七年）〜として刊行された。編者のシーバークは牧師、学者、作家、編集者であり、米国ユニテリアン・ユニバーサリズム教会の事務局長でもあった（*Carl Seaburg Dictionary of Unitarian & Universalist Biography*）。この『同仁』は「同仁キリスト教会の歴史の概略と写真集」だが、増野『日記』が書かれた時期については言及が少ない。写真も含めて *The Universalist Leader* のバックナンバーを検索することで、同仁基督教会から同仁キリスト教会への歩みが、さらに明らかになると考えられる。これも後日を期したい。

六月が六日、七月が六日、八月が五日、九月が一〇日、一〇月が一八日、計六〇日にのぼり、全体の二〇%である。

や交遊の減少、記載の減少が続ぎ、無記入の日は一月が四日、二月が二日、三月が三日、四月が五日、五月が一日、

本『日記』に見られる増野の日常生活は、肺患の進行とともに次第に体力が衰えていったことを示している。外出

### 増野悦興の日常 (三)



日本のユニバーサリスト宣教師団  
後列左より 伊藤仙峰、夫人ケイト、ケイト、  
ミス・アズバン、赤司繫太郎  
前列左より 長野直一郎、吉村秀三、  
ケールン夫人、ケールン、長野  
*The Universalist Leader* November 1, 1902  
(『同仁』2頁)

検温記録もつけなくなる。病状を心配してか、旧知の来訪者や来信も多くなるが、相変わらず律儀に返信をしている。五月一七日の入院前日まで、小久保弥太郎医師の来診は九回に及んでいる。入院を覚悟するに際して、負債返済と身辺整理も行い、卒業生には強気を装いながらも、二年前には、「御年貢ヲ納ムル時期已ニ到来セリ」（前掲一九〇九年四月一三日付安部磯雄宛書簡）とも記していた。

四月にはブラックマー・ホームのアズバンと私的な祈祷会を始めるが、五月の入院で中止を余儀なくされている。これが最後のユニバーサリスト教会での交流となった。

六月には川越中学校卒業生・新旧職員・川越町有志からと、同志社英学校以来の知人から入院見舞金が届き、骨を折ってくれた関係者への礼状を東洋内科医院（高田病院）でしたためている「六月一日、一四日」。

七月末に京都の西尾幸太郎が見舞っている「七月三十一日」が、妻咲子からの依頼であるう。八月に咲子の母畑もとの来状「八月二日」があり、翌日返信しているが、この頃から死期が近いことを実感したのではないだろうか。同志社英学校関係者への入院費援助依頼発起人にも礼状を出している「八月一八日」。他界する一カ月前の九月下旬まで、負債の返済をしている「九月二六日」。一〇月に入ると記入が途切れ「一〇月三日」、四日以後、妻咲子が枕辺に添った二週間余は空白である。

「金銭支出簿」からすると、一九一一年九月までの総支出は三七二・七八五円で、うち返金が八一・五円（「駒込三九・五円、タイムス四二円」二二％）、入院料一〇一・七五円（二七％）、生活費などは一八九・五三五円（五一％）である。一年の月平均支出が約二二円である。入院にあたって処分した家財・洋服などは三五・七円で売却している。増野は最後まで厳しい生活を続けていた。

なお、他界後の東洋内科医院への一〇月入院料・茶価の領収書が残されている（木村滋子氏蔵「増野悦興文書」〔仮

目録」A―33)が、料金は半額の六・七二円で、入院料の総額は一〇八・四七円だった。火葬費用が七・八円(同A―32―3)、葬儀料が一〇・八円(同A―32―2)、合計一八・六円であった。以降、咲子は釜山高等女学校などで英語を教えたりしながら遺児肇(一九〇七―一九七九)を育て上げた。

本『日記』第廿四号(一九二一年)での記載回数(第廿二号「一九〇九年」・第廿三号「一九一〇年」)の多い人物名と回数は次のとおりである。病状のさらなる悪化と入院もあり、交流範囲と人物とが狭められた。

安部「磯雄」	37 (58・79)	ケールン	28 (66・70)	ロブデル	24 (51・46)
アズバン	18 (57・38)	岸本「能武太」	17 (22・4)	岡田「恒輔」	17 (34・15)
「増野」公平	16 (0・6)	村井「知至」	16 (41・6)	駒込	16 (42・36)
タイムス	13 (14・18)	岡田「正男」	13 (19・14)	大熊	12 (35・12)
小久保「弥太郎・医院」	11 (2・17)			波多野「培根」	8 (7・22)
西尾「幸太郎」	8 (6・5)	乙女	8 (0・7)	中島「徳蔵」	7 (11・26)
安部「立郎」	6 (0・0)	長野「直一郎」	3 (38・14)	村田「勤」	3 (6・3)
水平「三治」	2 (23・34)	「増野」自助	2 (11・3)	松尾「音次郎」	2 (14・23)
松浦「政泰」	1 (14・16)	佐藤「潔」	0 (33・21)	ハーサウエイ	0 (19・6)
堀江「義子」	0 (18・3)	藤原	0 (7・36)	伊藤「仙峰」	0 (12・20)

『増野悦興日記』第廿二号（一九〇九年）～第廿四号（一九一一年）での記載回数が多い人物名・つながりのある人物名と回数は次のとおりである。

安部〔磯雄〕	174	ケールン	164	ロブデル	121	アズバン	113	駒込	94
岡田〔恒輔〕	66	村井〔知至〕	63	水平〔三治〕	59	大熊	59	長野〔直一郎〕	55
佐藤〔潔〕	54	岡田〔正男〕	46	タイムス	45	中島〔徳蔵〕	44	岸本〔能武太〕	43
藤原	43	松尾〔音次郎〕	39	波多野〔培根〕	37	伊藤〔仙峰〕	32	松浦〔政泰〕	31
小久保〔弥太郎・医院〕	29	ハーサウエイ	25	〔増野〕公平	22	堀江〔義子〕	21		
西尾〔幸太郎〕	19	〔増野〕自助	16	乙女	15				

三回に分けて、増野悦興晩年の『懐中日記』第廿二号・第廿三号・第廿四号を翻刻したが、第一号～第廿一号は未発見である。書き継がれていたとすると、単純計算では、第一号は一八八八年、二三歳の増野が高鍋に日向基督教会を設立し、松山高吉らの下で按手礼を受け、牧師に就任した年である。この間の『日記』や書簡類は、娘文子を亡くし、夫悦興が他界した後、息子肇への肺患の罹患を恐れた妻咲子が処分したのかもしれない。

今後、木村滋子氏所蔵「増野悦興文書」の増野咲子宛書簡の解説、ハーバード神学校図書館保管のユニリアン・ユニバーサリスト協会資料の調査を進めたい。

翻刻にあたり、キリスト教同仁社団、石井瑠美氏、児島康夫氏、鈴木一正氏、ハーバード神学校図書館にお世話になり、御礼を申し上げます。機会をくださった『同志社談叢』編集委員会、事務局の社史資料センターに感謝申し上げ

げます。

## 追記

増野悦興晩年の日記第22号・第23号・第24号の翻刻作業の過程で、ケンブリッジのハーバード神学校図書館で、米国ユニバサリスト教会の週刊機関紙『*The Universalist Leader*』に、日本同仁基督教会の飯田町教会牧師として活動していた増野の記録が見つかった。本稿で紹介した日露戦後と思われる肖像写真と、英文報告、それにブラククマー・ホーム、東京教会、秋田教会、静岡教会、名古屋教会、増野の動向などは貴重である。三本の英文は長文ではないが以下の通りである。

1905.11.4. Piety: A National Characteristic of the Japanese Y. Mashino

1907.11.7. The Work of Our Church in Tokyo The. Rev. Mashino

1909.11.27. A Summer Vacation in the House of Our Father The. Rev. Mashino

本稿では、このうち三本目を訳して紹介したが、その後、ライブラリアンの協力を得て、『*The Universalist Leader*』の一九〇九年のみならず、一九〇二、一九〇三、一九〇五、一九〇六、一九〇七、一九一〇、一九一一、一九一二と全部で九年分の「日本特集」が見つかった。感銘を受けたのは、川越中学校の卒業生や教員、川越町有志からの義援金を贈られた時点で、病床の増野はユニバサリスト教会米国人宣教師団からの病氣 (tuberculosis) 見舞い金を断っていることである。

また、この英文報告は日露戦後の日本人の国民道德のあり方について述べており、増野の著書『高貴なる人格』（一九一〇年）の主張のまともになっている。

増野は、川越中学校長を不本意に辞めた後も東京で、万人同胞・万人救済を掲げる少数派の日本同仁基督教会牧師として、一貫して青年育成と国民道德の確立を希求していた。このことは、日本の近代にプロテスタントキリスト教が流入してきた際の、日本人の宗教心や倫理観の形成という点で、とても興味深い事実の一つである。